教育研究上の目的および３ポリシー

2022 年度（R4）入学生用

総合福祉学部

教育研究上の目的

多角的視野から教育・研究に取り組み、知識、技術、社会的実践力を錬磨し、福祉社会の実現に資する人材の育成を目的とする。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

1. 求める学生像

広く人々の幸せや福祉の向上に貢献したい人。各学科の教育・研究目的に共鳴し、主体性を持って人々とともに学ぶ意欲を持った人。各学科の教育内容を学修するのに十分な基礎学力、共感力、コミュニケーション能力、論理的思考力を備え、実践にいかす意欲を持った人。多様な文化を理解し共存できる柔軟性を持った人。

2. 入学前に培うことを求める力

高等学校までの履修内容を文系・理系を問わず幅広く総合的に身に付けている。他者への共感性を持ち、他者とのコミュニケーションを円滑にとれる。社会問題に関心を持ち、それらを他者とともに多角的に議論・検討し、共同して課題解決に取り組むことができる。文章を文法・論理性に則って作成することができる。

3. 評価方法

面接／書類審査（志望理由書・活動報告書・調査書・推薦書等）／学力検査／レポート／体験実習／実習報告／プレゼンテーション／ディスカッション／実技試験／小論文など、学科の教育内容と入試カテゴリーにより適宜組み合わせて評価します。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

1. 教育課程編成

初年次教育、専門教育を通して高学年になるにしたがい、総合的、かつ、専門的な内容を深化させます。同時に、キャリア教育を行い、実践と理論の双方向の結び付きのなかで、専門的な内容を深化させます。なお、入学前教育において、上記「入学前に培うことを求める力」の達成を支援します。

- **キャリア教育**
  実習・実学・インターンシップなどを活用し、実践と理論の関連付けのなかで、学生個々の進路／職業選択の機会を提供します。同時に、社会に通用する課題解決能力を養います。

2. 学修方法・学修課程

少人数クラスの中で、能動的な学修を取り入れた教育を行う。参加型・集団活用・問題解決・プロジェクト型・課題学修など、多様な形態を工夫し、主体的学びを進めます。ICT を活用し学生と教員の双方向コミュニケーションにより、学修効果を上げます。学修ポートフォリオを活用し学生自身による学修成果のモニタリングと課題設定を可能にします。

3. 学修成果の評価のあり方

ルーブリックによる総合的評価、各教科におけるディスカッションへの参加、報告／発表、レポート、筆記試験。

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位の授与に関する方針）

1. 身に付けるべき資質・能力の目標

社会における諸課題を理解するための基礎的知識をもとに課題を分析／説明し、他者とともに課題解決に取り組むことができる。そのための、文章作成能力、ICT 活用技術、統計知識、論理的思考力、問題発見・問題解決能力、他者への共感性、コミュニケーション能力が十分備わっている。高い倫理観を持ち社会的責任を果たす意志のもとに社会の中でリーダーシップを発揮し、身の周りから国際社会まで、人々の幸せや地域の福祉の向上に寄与することができる。

2. 学位授与の要件

各学科の必要単位数、必修科目要件、GPA（*1）要件を満たすこと。各学科の教育目標が定める知識・技術を修得し、上記の能力を備えた者に各学位を授与します。

（*1）GPA：Grade Point Average の略。授業科目ごとの成績について、例えば 5 段階（秀・優・良・可・不可）で評価した上で、それぞれに対して 4・3・2・1・0 のようにグレード・ポイント（GP）を付与し、その平均を算出して評価を行います。

社会福祉学科

教育研究上の目的

人間理解のための深い教養と福祉の専門知識を修得し、福祉領域における問題解決能力を有する人材を育成する。

教育目標

本学科の教育目標は、現在の社会構造や福祉環境を多面的に理解し、幅広い教養と深い専門領域の知識や技術を学修することによって、社会の発展に寄与できる人、多様な人々のライフステージのなかですべての人々の「幸せ」や「福祉」、「安全」や「安心」を追究できる人、多様な人々の生活問題を主体的に解決できる人、共生社会の実現に貢献できる人を育成することです。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

1. 求める学生像

(1) 主体性を持って人々とともに学び、実践する意欲を持った人。
(2) 社会福祉学を学び、人々の幸せや福祉、地域共生社会の実現に貢献する人。

2. 入学前に培うことを求める力

(1) 知識・技能

① 高等学校までの履修内容について、総合的に身に付けている。

(2) 思考力・判断力・表現力等

① ものごとを筋道立てて考えることができる。
② 課題を設定して社会調査や聞き取り、文献などの資料で調べ、ものごとを的確に認識し、自身の見解を明らかにすることができる。
③ 課題について調べ、分かったことや気付いたことを他者に伝えることができる。

(3) 主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度

① 自分の目標を持って意欲的に学ぶことができる。
② 他者を尊重することができる。
③ 他者と協働して課題に取り組むことができる。

3. 評価方法

(1) 知識・技能については、提出書類の活動報告書・調査書・推薦書等の書類審査、学力検査、レポート、プレゼンテーション、小論文により評価します。
(2) 思考力・判断力・表現力等については、提出書類の志望理由書・推薦書等の書類審査、学力検査、レポート、プレゼンテーション、面接、小論文により評価します。
(3) 主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度については、提出書類の志望理由書・活動報告書・調査書等の書類審査、レポート、プレゼンテーション、面接により評価します。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

1. 教育課程編成

社会福祉実践力を体系的に修得するために、以下のように教育課程を編成しています。

(1) 初年次教育

広い意味での「教養」を涵養し総合的・多角的な見方を身に付ける科目と、大学での学修への導入を目的とした科目を配置しています。例えばリエゾンゼミⅠでは、レポートの作成やプレゼンテーションの仕方、ICT の使い方（図表作成を含む）を学びます。また、グループ学習で地域の課題を調べ、社会問題への意識を培い、解決策を考えます。そのグループ学習では社会福祉の倫理観に基づいたコミュニケーション能力や人間関係づくりのあり方を学びます。

(2) 基盤教育

1 年次より、総合的な見方、社会福祉学の基礎、隣接分野の基礎、社会における課題などを幅広く学びます。

(3) 専門教育

知識や技術を学び増やすだけではなく、その「理念・考え方」を学ぶことができ、福祉領域における課題解決能力、実践力が修得できるように科目を配置しています。
1 年次から 4 年次にかけて、社会福祉領域における基本的な理念を学ぶ科目、さまざまな領域ごとの制度や対象者理解を学ぶ科目、ソーシャルワークの知識と技術を身に付ける科目を配置しています。本学科の特徴の１つとして、大学関連施設等と連携し福祉の現場にお

ける多様なニーズのある人々の理解と支援サービス・支援制度の現状と課題などについて実践的に学ぶ実学臨床教育があります。また、心理、保健医療、行政、教育、産業・労働、司法などの関連領域についても幅広く学ぶことができます。

(4) 資格の取得

社会福祉学の価値・倫理、知識と技術を身に付けた専門職になるために、社会福祉学の科目に資格取得のための指定科目を並行して履修することができます。国家資格では、社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士の国家試験受験資格、保育士資格、認証資格としてスクールソーシャルワーカーの認証資格などを得ることができます。

(5) キャリア教育

社会福祉学の知識と技能を職業能力につなげるために、1 年次よりボランティア活動、インターンシップ、各種学外実習、課外活動等の社会活動経験に取り組みます。また、1 年次から 4 年次にかけて、演習等を通じて職業倫理等について考え、授業内外の学科のガイダンスやセミナーを通じて社会福祉学の専門性をいかした仕事について学びます。現在そして、これからの社会について考えると多くの領域で社会福祉学の知識と技術が活用されると考えられますので、ここでいう仕事の範囲とは、社会福祉施設や医療機関だけでなく、教育、企業、行政、司法などを含めた広い領域に及びます。

2. 学修方法・学修過程

社会福祉学の価値・倫理、知識と技術を修得するために、主体的な学び（参加型学習、グループワーク、課題解決型学習（PBL）、プロジェクト型学習、課題学習等）を促す講義、演習、実習を行います。

(1) 講義

社会福祉学の理念、制度、技法を具体的な事例と関連付けて講義します。学生は得られた知識や技能に基づいて、自分のこれまでの実践などと関連付けて整理します。

(2) 演習および資格取得のための演習

演習では、特定のテーマについて、文献等を講読したり、調査を行ったりして、これを発表し、討議しあう体験を積むことによって、自主的な研究態度を養成し、研究方法を体得します。

資格取得のための演習では、社会福祉学の知識と技能を用いて課題を解決する演習を行います。学生は、ロールプレイやソーシャルワークに関する事例研究を通し、コミュニケーションやアセスメント（課題分析）の力を身に付けます。

(3) 実習

社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士、保育士、スクールソーシャルワーカーの資格の取得希望者は、社会福祉施設・病院などでの実習を行います。実習を通して、ソーシャルワークの基礎的な技術を修得するとともに、具体的な課題解決の方法を学びます。

(4) 卒業論文等の作成

学修の集大成として卒業研究を行い、論文を作成します。教員の指導のもとで、学生はこれまでの学び、興味や関心に基づいて課題を設定し、データを収集、分析し、結果を考察します。

3. 学修成果の評価のあり方

社会福祉実践力を、教員と学生自身双方によって評価します。学生は、単位の修得状況、学修実態調査、卒業者アンケートの機会を通じて、ディプロマ・ポリシーの達成度を意識して確認します。各科目の成績評価は、到達目標の達成度（一部にルーブリック評価を導入）、学修の過程を踏まえて行われます。

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位の授与に関する方針）

社会福祉の学びの究極は人間と社会を理解することです。したがって、本学科が育成しようとしている人材に求められる資質は、人間と社会への深い関心と幅広い視野です。人間のニーズ（必

要性）は多種多様であり、たとえ同じニーズであってもその状況に応じて、一つとして同じ対応はあり得ません。このような人間と社会を対象とする「社会福祉」だからこそ幅広い視野が求められてきます。
したがって、大学の建学の精神である「行学一如」と、教育の理念である「自利・利他円満」および本学科の教育目標を理解し、124 単位の単位取得と要件、求められる GPA を満たした上で、社会福祉学の知識と技術を修得し、下記の資質能力について実践を通して理解を深めた人物に学位を授与します。

1. 学生が身に付けるべき資質・能力の目標

本学科では、社会福祉実践力を習得するために、以下の資質と能力を育てます。

(1) 学びと行（実践）のための知識・理解

① さまざまな環境下にある人々の生活や社会で起きている現象に関心を持つことができる。
② さまざまな環境下にある人々の生活状況、それらをとりまく社会構造、身体・心理的要件、かかわり方などにどのようなものがあるかを理解できる。
③ さまざまな環境下にある人々の福祉的課題について、アセスメントできる。
④ 自らの関心や適性をふまえて、②③のなかでも特にどのようなアプローチで対象者の生活状況または社会をより良くすることができるかについて理解できる。
⑤ ④のアプローチについて、専門的知識を身に付けた体験がある。

(2) 学びと行（実践）のための技術

① 特定の課題について必要な情報を収集・整理・分析・考察し、文章化する（レポートまたはプレゼンテーションにまとめる）ことができる。
② ①を ICT を用いて発表することができる。
③ 他者の発表や意見を、関心を持って最後まで聞くことができる。
④ 他者の発表などに対して質問や発言をすることができる。
⑤ 他者の発言を促したり、自制を促すなどして全体の議論を調整することができる。

(3) 学びと行（実践）のための態度・志向性

① 普段の生活やさまざまな活動を通して抱いた疑問を大事にし、学びや行（実践）への動機を高めることができる。
② 疑問に答えるための行動を起こし（該当科目を履修する、図書館・各種メディアで情報を集める、教員・友人・家族・知り合いに聞く、当事者に聞きに行く、活動に参加する等）、自分なりの答えを見つけることができる。
③ 自分の意見を他者にわかるように伝える工夫をしており、適切に表現できる。
④ 異なる立場にある人の意見や考え方を知り、対話の中で理解を深めることができる。
⑤ 社会福祉の倫理観に基づいたコミュニケーション能力を発揮することができる。

(4) 行動

① 「学びと行（実践）のための態度・志向性」の 2. で見つけた現時点での自分なりの答えを実践すべく、目標を設定し、行動に移すことができる。
② その行動に必要な専門的知識・技能の向上に努めることができる。
③ 目標に向かって他者と協力することができる。
④ 目標に向かって最後までやり抜くことができる。／意欲を持っている。
⑤ 目標に向かう過程で困難に直面しても、成長する機会として前向きに捉え、乗り越えるための工夫ができる。
⑥ 身に付けた知識・理解、技術、態度・志向性を持って社会問題を解決する。／社会に貢献することに喜びを感じる。

2. 学位授与の要件

本学科の教育目標を理解し、124 単位以上の単位取得と要件、求められる GPA（*1）を満たした上で、社会福祉学の知識と技能・技術を修得し、上記の資質能力について実践を通して理解を深めた人物に学位を授与します。

（*1）GPA：Grade Point Average の略。授業科目ごとの成績について、例えば5段階（秀・優・良・可・不可）で評価した上で、それぞれに対して4・3・2・1・0のようにグレード・ポイント（GP）を付与し、その平均を算出して評価を行います。

福祉心理学科

教育研究上の目的

人間理解の基礎となる心理学的視点や理論・方法を学び、人々の抱える心理的問題を分析・解決できる人材を育成する。

教育目標

本学科は、本学の建学の精神である「行学一如」と、教育の理念である「自利・利他円満」を踏まえて、心理学の知識と技能を備え、それらを人々の幸せや福祉のためにいかすことのできる力、すなわち心理実践力のある人材を育成します。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

1. 求める学生像

心理学の知識と技能を備え、それらを人々の幸せや福祉のためにいかすことのできる力、すなわち心理実践力を高めます。そのために、次のような学生を求めています。

(1) 主体性を持って人々とともに学ぶ態度を備えた人。
(2) 心理学を学び、人々の幸せや福祉に貢献したい人。

2. 入学前に培うことを求める力

(1) 知識・技能

① 高等学校までの履修内容について、文系・理系にかかわらず幅広く学習し、総合的に身に付けている。

(2) 思考力・判断力・表現力等

① 他者の考えも尊重しながら、自分の考えをわかりやすく伝えることができる。
② テーマについて、幅広く客観的な資料に基づき検討を行い、気付いたことやわかったことを表現することができる。

(3) 主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度

① 高校在学中または大学入学後に、クラス活動や部活動、ボランティア活動、特別活動、学外の活動などにおける問題や課題について、さまざまな人々と力を合わせて取り組む意欲がある。

3. 評価方法

(1) 知識・技能については、提出書類の活動報告書・調査書・推薦書等の書類審査、学力検査、レポート、プレゼンテーション、小論文により評価します。
(2) 思考力・判断力・表現力等については、提出書類の志望理由書・推薦書等の書類審査、学力検査、レポート、プレゼンテーション、面接、小論文により評価します。
(3) 主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度については、提出書類の志望理由書・活動報告書・調査書等の書類審査、レポート、プレゼンテーション、面接により評価します。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

1. 教育課程編成

心理実践力を体系的に修得するために、以下の教育課程を設けています。

(1) 初年次教育

「心理実践力」とは何かを理解し、修得するための基本となるスキルを養成する

リエゾンゼミⅠでは、レポートの作成やプレゼンテーションの仕方、ICT の使い方（図表作成を含む）を学び、グループ学習のなかで人間・集団・社会の課題を調べ、心理学の観点から対策や問題解決を考えます。また、心理学を踏まえた人間関係づくりやコミュニケーション能力の修得、心身の健康の向上に取り組みます。

(2) 基盤教育

心理学的なものの見方の基本となる理論や関連する領域の基礎を学ぶ

1 年次より、総合的な見方、心理学の基礎、隣接分野の基礎、社会における課題を幅広く集中的に学びます。

(3) 専門教育

「心理実践力」を体系的かつ効果的に修得する

1 年次から 3 年次にかけて、心理学概論、福祉心理学、心理学実験、心理学研究法、心理検査法実習等の科目を通じて、心理学の代表的な知識と基本的な技能を学びます。また、心理実践活動論や心理学実践研究実習等を通じて、実践について理解を深め、心理学を活用した問題解決力を高めます。2 年次からは、3 つの履修コース（臨床心理学、発達・教育心理学、認知・社会心理学）からいずれかを選択し、各コースで修得を推奨している授業科目の例（履修モデル）に沿って深く学びます。また、福祉、教育、保健医療、産業・労働、司法などについても幅広く学ぶことができます。

(4) 資格取得

心理学の学修と両立する学生のための充実した科目構成とサポート体制により資格取得をめざす

心理学の知識と技能を身に付けた専門職になるために、心理学の科目と免許・資格のための指定科目を両立して履修することができます。国家資格では、公認心理師の受験資格を得ようとするための教育課程が設置されています。また、養護教諭免許、精神保健福祉士の受験資格および社会福祉士の受験資格を得ることができます。また、心理学関係の認定資格では、認定心理士の資格、福祉心理士の資格および健康心理士の受験資格を得ることができます。

(5) キャリア教育

ひとり一人のキャリアを見据えた実践的かつ学科独自のキャリアサポートにより就業力（*1）を養成する

心理学の知識と技能を職業能力につなげるために、1 年次より、実学臨床教育、ボランティア活動、インターンシップ、各種学外実習、課外活動等の社会活動経験に取り組みます。また、1 年次から 4 年次にかけて、リエゾンゼミⅠ～Ⅳを通じて心理学と社会とのつながりや職業倫理について考え、授業内外の学科のガイダンスやセミナーを通じて心理学の学びをいかした仕事について学びます。

（*1）就業力とは、学生が卒業後自らの素質を向上させ、社会的・職業的自立を図るために必要な能力のことをいいます（大学設置基準）。

2. 学修方法・学修過程

多様なアクティブ・ラーニングにより社会や地域とつながる

心理学の知識と技能を修得するために、主体的な学び（参加型学習、グループワーク、問題解決型学習（PBL）、プロジェクト型学習、課題学習等）を促す講義、演習、実験・実習を行います。学生同士や教員、社会や地域の人々との対話を重視します。

(1) 「心理実践力」の修得を見据えた具体的かつ実践的な講義

心理学の知識と技能を具体的な行動と関連付けて講義します。学生は得られた知識と技能に基づいて、自分のこれまでの体験を意味付けて整理します。

(2) オールジャンルの心理学教員によるアクティブ・ラーニングを活用した専門的な演習

心理学の知識と技能を用いて課題を解決する演習を行います。学生は心理学に関するトピ

ックや事例を扱い、発表や討論を行います。
(3) 科学的思考と問題発見・解決力を養成するための実践的な実験・実習
心理学の実験、心理検査の実習、研究法の実習を行います。これらを通して、心理学の技能の基礎を修得するとともに具体的な課題解決の方法を学びます。
(4) 1 年次から 3 年次までのアクティブ・ラーニングの集大成としての卒業論文等の作成
（1）から（3）の学修の集大成として卒業論文等のレポートを作成します。学生はこれまでの学び、興味や関心に基づいて課題を設定し、データを収集し、結果を考察します。

3. 多様な学生の学びと成長を多角的に評価する学修成果の評価のあり方

心理実践力は、教員と学生自身によって評価されます。学生は、単位の修得状況、GPA および本学独自の学修ポートフォリオによって学びの過程と学士力と学位授与の方針の達成度を可視化して確認します。成績評価は、到達目標と到達目標の達成段階表（ルーブリック）、学修過程（学修のふり返りやディスカッション、グループ学習への参加等）を踏まえて行われます。

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位の授与に関する方針）

1. 学生が身に付けるべき資質・能力の目標

心理実践力を修得するために、以下の 7 つの資質・能力を育てます。

(1) 多文化共生社会における総合的な人間理解力
① 人の心には、人々に共通する心の特徴（一般的原理や法則）と、人それぞれの心の特徴（個人差や多様性）があることを理解できる。
② 人の心と行動は、社会・環境と相互に影響しあっており、社会・環境の影響で変わることを理解できる。
③ 生活場面における人の心と行動について、心理学および隣接領域を含むさまざまな観点から幅広く総合的に理解できる。

(2) 根拠に基づく情報発信力
① 心理学の方法（文献検討、観察、実験、調査、面接など）を用いて、客観的なデータを集めることができる。
② 心理学の方法で得たデータを、図や表を用いて整理し、他者にわかりやすく伝えることができる。

(3) 批判的・創造的思考に基づく問題発見・解決力
① 多様な生活場面における人の心と行動を適切に把握して分析し、より本質的な問題に気付くことができる。
② さまざまな分野の知識を柔軟に組み合わせ、多様な他者の気持ちや意見を考慮し、予防策や解決策を見出すことができる。

(4) 多様な人々への共感と自他尊重に基づくコミュニケーション能力
① 他者の気持ちや意見を共感的に理解し、対話のなかで理解を深めることができる。
② 他者の気持ちや意見を尊重しながら、自分の気持ちや意見を適切に表現できる。

(5) 自己理解に基づくセルフコントロール力
① 自分の気持ち、考え方、行動とそれらの特徴に気付くことができる。
② 怒りや不安等の自分の感情に気づき、ストレスに対処することができる。
③ 自分の成長につながる目標を立て、やる気（モチベーション）を高めることができる。

(6) 集団理解に基づく対人調整力
① 集団の目標を共有し、役割を分担し、取り組む課題を明確にすることができる。
② 集団で情報を共有し、メンバーのやる気（モチベーション）に気を配り、自由に意見を出してもらうことができる。
③ メンバーのやりがいや喜びを共有し、メンバーの取り組みを前向きに評価できる。

(7) 多文化共生社会における心理学の学びをいかした社会貢献力
① 積み重ねてきた学びを統合して、多文化の人々の幸せや福祉に貢献することができる。
② 個人や社会に役立つテーマを設定し、積み重ねてきた学びをいかしながら当事者や関係

者とともに課題の解決に取り組むことができる。

2. 学位授与の要件

本学科の教育目標を理解し、124 単位以上の単位取得と要件、求められる GPA（*1）を満たした上で、心理学の知識と技能を修得し、上記の「心理実践力」について実践を通して理解を深めた人物に学位を授与します。

（*1）GPA：Grade Point Average の略。授業科目ごとの成績について、例えば 5 段階（秀・優・良・可・不可）で評価した上で、それぞれに対して 4・3・2・1・0 のようにグレード・ポイント（GP）を付与し、その平均を算出して評価を行います。

福祉行政学科

教育研究上の目的

「福祉」の視点を土台として、地域社会及び住民の福祉の向上に貢献する高い志と強い責任感・倫理観をもち、地域の諸問題に主体的に対応できる幅広い基礎能力を有する人材を育成する。

教育目標

本学科は、人間社会を科学的に探究することによって得られる「理論知」はもちろん、地域社会での活動を通して得られる「実践知」の修得も重要であると考え、これらの理論知と実践知が融合された能力を備えた人材の育成を目標としています。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

1. 求める学生像

本学科では、上記の教育目標に共鳴し、意欲を持って学ぼうとする志を持つみなさんを積極的に受け入れたいと考えています。本学科が求めているのは、以下の通りです。

(1) 社会福祉、環境・都市問題に関し深く学修する意欲のある人。
(2) 地域自治や地域社会に関心を持ち、地域の発展に寄与する意欲のある人。
(3) 法律学・政治学・経済学を学修するための基礎学力を備えた人。
(4) 論理的思考能力のある人。
(5) さまざまな問題について「福祉」と「行政」の観点から考察し、問題を解決するための方法を主体的に獲得しようとする人。

2. 入学前に培うことを求める力

(1) 知識・技能

① 高等学校までの履修内容のうち、文系・理系にとらわれず幅広く学習し、バランスよく身に付けている。
② 高等学校までにボランティア活動など広く社会的活動にかかわった実践経験などを通して、獲得した知識を現実の社会問題と結び付けて考察することの重要性を理解している。

(2) 思考力・判断力・表現力等

① 他者を思いやる人間性を持ち、奉仕的精神を持って行動する。
② 知識を詰めこむことよりも、持っている知識を関連付けて解を導く能力と姿勢がある。

(3) 主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度

① 自己のみならず他者や広く社会問題についても関心を持ち、自ら主体的に学び現代社会が直面する社会的、行政的課題の解決に取り組む。
② 多様な背景を持つ人々とコミュニケーションができる基礎的スキル。

3. 評価方法

(1) 知識・技能については、提出書類の活動報告書・調査書・推薦書等の書類審査、学力検査、

レポート、プレゼンテーション、小論文により評価します。
⑵ 思考力・判断力・表現力等については、提出書類の志望理由書・推薦書等の書類審査、学力検査、レポート、プレゼンテーション、ディスカッション、面接、小論文により評価します。
⑶ 主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度については、提出書類の志望理由書・活動報告書・調査書等の書類審査、レポート、プレゼンテーション、ディスカッション、面接により評価します。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

本学科では学科の教育目標で示した人材育成のために、基盤教育科目、専門教育科目を体系的に編成するだけではなく、講義、演習、実習等を適切に組み合わせ、アクティブ・ラーニングを促進する授業を開講します。カリキュラムの体系を示すために、科目間の関連性を示した履修モデルを作成しています。教育内容、教育方法、教育評価、学生支援については以下のように方針を定めます。

1. 教育課程編成

⑴ 初年次教育（リエゾンゼミⅠ（基礎演習））

1 年次に、リエゾンゼミⅠ（基礎演習）という少人数制による演習科目において、(a) 学びの基本、(b) キャンパス生活、(c) コミュニケーション能力、(d) 情報リテラシー、(e) キャリア形成等を集中的に学び、学生生活に円滑に入れるよう指導します。

⑵ 基盤教育

基盤教育科目では、幅広い教養を身に付けることを目的とし、人間の社会・文化的活動、心身の健康の問題、人間の多様性、科学的な考え方、地域・社会とのかかわりについて学修します。本学の基盤教育は、現実社会とのつながりや実学と実践を重視した学びを特色としています。

⑶ 専門教育

本学科の専門教育課程は、以下のように、高い職業モラルを有し、行政、福祉などでの専門知識をいかし、地域住民のために効果的に奉仕できる人材を育成するために用意された包括的なプログラムにおいて学びます。

① 主に 2 年次に学ぶ専門基礎科目では、社会福祉学や行政学、政治学、経済学の専門科目を学ぶための基礎を養います。
② 専門基幹科目では、A 群で社会福祉行政に関する専門科目、B 群で政治、経済、法律、C 群で防災・減災、D 群で社会福祉関係資格科目などを配置しています。
③ 官民協働の橋渡し役、地域共創の担い手になるため、地域福祉に関する科目も学べます。
④ 国際社会に対応できる人材となるため、アジアやヨーロッパなどでの社会福祉系国際交流プログラムが基盤教育科目に設置されているとともに、専門科目においても国際系の科目を配置しています。

⑷ 資格教育

本学科では、福祉行政において必要とされる知識、実践を担う人材育成のための国家資格科目を配置し、取得の支援をしています。

⑸ キャリア教育（全学共通）

キャリア教育では、自らかかわる（主体性）、自ら考える・気付く（課題発見能力など）、自らアクションを起こす（実行力）ことを目標にしています。本学では、リエゾン型キャリア教育を開発し、１年次より社会とのつながりを持って実践的にキャリアアップを進めています。

2. 学修方法・学修過程

以下の学修方法により学びを進め、深めていきます。

⑴ 主体的な学びの力を高めるためにアクティブ・ラーニングを取り入れた教育方法を、初年次から推進します。
⑵ 学修ポートフォリオを 4 年間かけて作成し、自己の学修成果と学生生活を自分自身で管理

し、振り返ることを推奨します。また、学内ポータルサイトを活用し、教員と学生の双方向のコミュニケーションを密にすることで、学修成果を高めます。
(3) 遠隔授業を一部科目に取り入れながら、教育効果の維持および向上に努めます。

3. **学修成果の評価のあり方**
(1) 学修成果は、教員によるルーブリックを活用し総合的評価を行います。
(2) 学修成果の評価を行うためにルーブリック、学修ポートフォリオを活用し、学修の展開や蓄積の可視化しています。

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位の授与に関する方針）

1. 学生が身に付けるべき資質・能力の目標

(1) 知識・理解
① 基礎的知識：社会科学、人文科学、自然科学の基礎的知識を用いて、社会のさまざまな課題を的確に把握、分析してそれを他者に説得力を持って説明できる。
② 専門的知識：行政学、社会福祉学、政治学、経済学、法学の専門的知識を用いて、社会のさまざまな課題解決のための諸方策について説得力を持って説明できる。
③ 応用的知識：行政や社会福祉、地域、防災・減災、国際化などの分野で応用的知識を用いて、地域社会の抱えるさまざまな課題に対する実践について説得力を持って説明できる。

(2) 汎用的技能
① レポート作成力：表やグラフを活用して他者にわかるように作成できる。
② ICT 活用力：ICT を用いて、社会問題に関する情報収集・分析・プレゼンテーションを適切にできる。
③ 論理的思考力、批判的思考力：行政学、社会福祉学、政治学、経済学、法学の知識と技能を活用して、多角的な視点から論理的に分析できる。
④ 問題解決力：地域的問題を発見し、その問題の解決・調整に必要な情報の収集・分析・整理し、その問題を解決・調整できる。
⑤ 社会福祉学や地域福祉などの知識と技能を活用して、共感的に傾聴するとともに、自分とは異なる意見を持つ人とも互いに尊重しながらコミュニケーションをとれる。

(3) 態度・志向性
① 自己管理力：学科で学ぶ高い公共心を保持し、社会への奉仕の精神を基に自らを律して行動できる。
② チームワーク、リーダーシップ：社会福祉学、行政学、政治学の知識と技能を踏まえて、リーダーシップを発揮して地域の利害を調整し、官民の協調・協同の橋渡しを行える。
③ 倫理観：倫理・道徳に関する社会福祉学、行政学、政治学、経済学、法学の知識と技能を踏まえて、自らの良心と社会の規範やルールにしたがって行動できる。
④ 市民としての社会的責任：学びを深めたさまざまな領域の知識・技能を社会で発揮し、人々の幸せや地域社会の発展のために積極的に関与できる。

(4) 統合的な学修経験と創造的思考力
① 創造的思考力：社会福祉学、行政学、政治学、経済学、法学などの知識・技能・態度を統合的に活用し、自ら課題を設定し、実験・調査などを行い、分析・整理して独自の解決法・解決案を導き、地域社会に貢献できる。
② 社会における顕在的・潜在的ニーズの発見と解決策の提案：顕在化している社会の諸問題だけではなく、潜在的な社会的問題を発見してそのリスクを社会に発信し、解決策を官民で協働しながら導き出す媒介者たることができる。

2. 学位授与の要件
本学科では、学科の教育目標を理解し、124 単位以上の取得と要件、求められる GPA（*1）を満たした上で学科の教育目標の定める知識と方法・技術を修得し、上記に示す各種能力を備えた人物

に学位を授与します。

（*1）GPA：Grade Point Average の略。授業科目ごとの成績について、例えば5段階（秀・優・良・可・不可）で評価した上で、それぞれに対して4・3・2・1・0のようにグレード・ポイント（GP）を付与し、その平均を算出して評価を行います。

総合マネジメント学部

教育研究上の目的
人間活動におけるマネジメントの知識と能力をもち、リーダーシップを発揮しうる人材を育成することを目的とする。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）
「企業」「行政」「福祉」「教育」「医療」など幅広い職業人の養成を目的とし、そのためのマネジメント能力を育成します。アドミッション・ポリシーとして求めるものは「将来像を持つ進路意識」「学びに対してポジティブな姿勢」「ビジョンの形成」「公共性・倫理観」などです。入学試験においてもそれらの資質を考慮します。特に、総合型選抜、学校推薦型選抜などにおいてポリシーに対する適性、能力などを選考の基準にしています。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）
幅広い職業人養成のために社会性の涵養を重視した学修を行います。初年次から行われるリエゾンゼミにおいて「PBL」という問題解決型の学修で社会のさまざまな問題をテーマにしながら、「リーダーシップ」、「協調性」、「プレゼンテーション能力」、「社会性」、「社会の一員としての倫理」などを身に付けます。また、職業人に必要な「キャリア・マインド」のためのキャリア教育、インターンシップも取り入れています。

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位の授与に関する方針）
学士課程教育のなかで、社会科学におけるさまざまな分野の知識、考え方を身に付けるとともに、「自己責任能力」、「社会性」、「思考力（論理的、創造的、批判的）」を養い、学士としての「質保証」の要請に応えます。

産業福祉マネジメント学科

教育研究上の目的
主として産業界にあって、経済的な効率経営に加えて、福祉的経営の視点も考慮することにより健全な経営を実現できる人材を育成する。

教育目標
近年、物事の本質や重要性を認識し、困難な問題でも積極的に解決しようとする問題発見・解決型のマネジメント能力を持った人材が強く求められています。また、社会に貢献するためには、「ヒト」「モノ」「カネ」をシステマティックにマネジメントするスキルとチームを成功に導くリーダーシップを身に付ける必要があると考えます。
本学科では、本学の建学の精神である「行学一如」と教育の理念である「自利・利他円満」を実現するために、人や社会のさまざまな問題を掘り起こし、提案・解決できるマネジメント能力に優れたリーダー的人材ならびに福祉マインドを持った創造性豊かな人材の育成をめざしています。
これらの目標を実現するために、以下の教育理念を掲げています。

⑴ 「教養教育の重視」: 教養は、人間性を豊かにし、人生そのものに潤いを与えてくれるものです。専門性の高い教育を行う際においても、常に教養教育の視点を忘れずに幅広い人間性の醸成に取り組みます。
⑵ 「学際的研究」: 情報科学が取り扱う学問領域は多種多様であり、これを「学際的」と言います。問題を分析・解決するために特定の学問からのアプローチだけはなく、さまざまな学問領域から多角的に見ることができる人材の育成に取り組みます。
⑶ 「問題解決型実践授業」: 社会や地域に存在するさまざまな問題を解決するため、自ら行動・研究し具体的な解決策を提案・実践できる人材を育成します。
⑷ 「現場主義」: 本学の建学の精神である「行学一如」を遂行するためには、積極的に学外に出て現場を精査して研究の成果を社会や地域に還元しなければなりません。机上の空論ではなく、常に現場とそこにいる人々に寄り添うことのできる人材を育成します。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

1. 求める学生像

〈主体性を持って人々とともに学ぶ意欲を持ち、地域に貢献する気持ちを有する人〉

本学は「行学一如」の建学の精神のもと「自利・利他円満」を教育理念としています。学問だけではなく、実践しながら、理解を深めていくことを建学の精神としているわけです。また、自己の考えをしっかり形成し人に伝えるとともに、人の意見もよく聞きながらお互いの理解を深めていくことにより、自分だけでなく周りの人、地域の人など、さまざまな人々の幸せに貢献できる人材の育成を目標としています。

2. 入学前に培うことを求める力

⑴ 知識・技能

国語はすべての学修に必要な基本科目であり、文章を読み内容が正確に把握できること、自分の考えを文章で表し、他の人が正しく内容を理解できることが特に重要です。英語は、グローバル化の進んでいる現在では、外国の人との意思疎通に必要な英会話が必須で、英語の文献を読むことも大学の学修では必要であり、辞書を見ながらでも英文の読解ができることも求められます。数学は、複雑な関係を整理して簡単に表し推論を容易にするので、基本的な内容を学習しておいてください。

⑵ 思考力・判断力・表現力等

物事を多方面から考える思考力、それに基づく判断力は、私たちが生きる上で常に必要とされます。いろいろな経験を経て身に付く能力なので、クラブ活動などを積極的に行うことも必要でしょう。また、自分の考えを言葉や文章で他の人に伝える能力−表現力−も私たちの生活には不可欠です。

⑶ 主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度

しっかりとした自分の考えを持つ一方、いろいろな人の考えを理解し、自己に役立てながら協働して学ぶ態度も身に付ける必要があります。

3. 評価方法

⑴ 知識・技能については、提出書類の活動報告書・調査書・推薦書等の書類審査、学力検査、レポート、プレゼンテーション、小論文により評価します。
⑵ 思考力・判断力・表現力等については、提出書類の志望理由書・推薦書等の書類審査、学力検査、レポート、プレゼンテーション、面接、小論文により評価します。
⑶ 主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度については、提出書類の志望理由書・活動報告書・調査書等の書類審査、レポート・プレゼンテーション・面接により評価します。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

本学科では、教育目標と教育理念を達成するために、基盤教育科目、専門教育科目を体系的に編

成するだけではなく講義・実習・演習などを適切に組み合わせ、能動的学修を促進する授業を開講します。カリキュラムの体系を示すために、科目間の関連性を示した履修モデルを作成しています。

教育課程編成、学修方法・学修過程、学修成果の評価のあり方、多様な学生の支援については以下のように方針を定めます。

1. 教育課程編成

(1) 初年次教育

１年次には全員リエゾンゼミに入り、大学における勉学方法、情報処理能力、キャンパス生活、コミュニケーション能力、キャリア形成といった基本的な学修を行い、学生生活にスムーズに入れるよう指導します。また、東北の地域課題、現代福祉の基礎、マネジメント基礎論等の基礎科目を履修し、社会科学を学ぶ問題意識の形成を図ります。

(2) 基盤教育

幅広い教養を身に付けることを目的とし、人間の社会・文化的活動、心身の健康の問題、人間の多様性、科学的な考え方、地域・社会とのかかわりについて学修します。本学の教養教育は、現実社会とのつながりや実学・実践を重視した学びを特色としています。

(3) 専門教育

学生は、２年次から自らの意志に基づいてゼミを選択し、専門科目を少人数のグループ教育により学びます。そこでは、自ら問題を発見し、自ら資料を探し調査し、報告し、ゼミ生・教員と議論を行うことになります。また、ゼミの運営も学生に任され、リーダーシップを発揮する機会が与えられます。カリキュラムは、福祉系、マネジメント・リスク系、経済・経営系、キャリア教育系、労働衛生系と体系的に用意され、学生の問題意識にしたがって体系的に履修できる体制を整えています。

講義においても、可能な限り学生との双方向の形態を採ることにより、学生の予習・復習を前提とした積極的学修を促す方針が採られています。

(4) 資格の取得

現在、社会で必要とされている防災士等の資格取得をめざします。

(5) キャリア教育

キャリア教育では、自らかかわる（主体性）、自ら考える・気付く（課題発見能力など）、自らアクションを起こす（実行力）ことを目標にしており、本学では、リエゾン型キャリア教育を開発し、１年次より社会とのつながりを持って実践的にキャリアアップを進めています。また、下記のようにキャリア教育にかかわる支援体制も整えています。

① キャリア形成支援の一環として、インターンシップ・各種実習・ボランティア活動・留学などの支援、進学説明会、卒業生との交流会を設けます。

② 授業に関する質問については、授業内や授業後、オフィスアワー、Web 学習支援システム（e-ラーニング）など質問の機会を多く設け丁寧に応じます。

③ 各種相談については、初年次のリエゾンゼミの主担任、副担任、ピア・メンター（先輩学生）、リエゾンゼミⅡ～Ⅳや演習科目の担当教員、学科長、その他関係部署の職員が相談に応じ支援します。

④ 各種ボランティア活動を希望する学生に対して、ボランティア支援課が相談に応じて支援します。

⑤ 海外を含む各種インターンシップを希望する学生に対しては、キャリアセンターが相談に応じ支援します。

2. 学修方法・学修過程

(1) アクティブ・ラーニング

アクティブ・ラーニングを取り入れた多様な教育科目を受講することで、初年次から主体的な学びの力を高めることができます。

(2) 学修ポートフォリオ

学修ポートフォリオを４年間かけて作成し、自己の学修成果と学生生活を自分自身で管理、

振り返ります。また、学内ポータルサイトを活用し、学生と教員の双方向のコミュニケーションを密にすることで学修成果を高めることができます。

(3) 問題解決型学習（PBL）

初年次から、問題解決型学習（PBL）に取り組むことで、高度な問題発見・問題解決能力を核とする「人間力」を身に付けることができます。

3. 学修成果の評価のあり方

学修成果の評価方法は、期末試験に加え理解度を適宜確認するために、小テストやレポートを行うことがあります。また、学生が主体的に学修計画、評価が行えるようにリエゾンポートフォリオやルーブリック等を活用します。なお、科目ごとの評価は、シラバスに明記された方法に沿って行われます。

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位の授与に関する方針）

本学の教育理念は、「行学一如」の建学精神のもと「自利・利他円満」を基本としています。座学だけではなく、実践しながら、理解を深めていくことを建学の精神とし、また自己の考えをしっかり形成し人に伝えると共に、人の意見もよく聞きながらお互いの理解を深めていくことにより、自分だけでなく周りの人、地域の人など、さまざまな人々の幸せに貢献できる人材の育成を目標としています。

私たちを取り巻く社会は、以前にも増して、先行きが不透明になり、さまざまな不確実性が増加しています。少子高齢化の到来、雇用問題、グローバル化の進展等がこうした例にあたります。本学科では、卒業後、企業や地域社会において、上の本学の基本理念を基本として、さまざまなリスクに直面した際に、物事の本質や重要性を認識し、自分なりの意志決定と行動を行うことができリーダーシップを発揮できる人材の育成をめざしています。

1. 学生が身に付けるべき資質･能力の目標

学士課程教育のなかで、社会科学におけるさまざまな分野の知識、考え方を身に付けるとともに、「自己責任能力」、「社会性」、「思考力（論理的、創造的、批判的）」を養い、学士としての「質保証」の要請に応えます。

(1) 豊かな人格形成の基本と専門領域へつながる基礎的学力を養うことができる
(2) 専門領域を超えての問題探究の姿勢を身に付けることができる。例えば、経済・経営理論の基本を理解し、異分野との比較・分析・考察ができる。
(3) 学際的な議論ができる。
(4) 多様な課題を解決しうる判断力を身に付けることができる。
(5) リーダーシップを発揮することができる。例えば、社会奉仕体験活動やフィールドワークなどの経験を通して、他者と協調・協働して行動できる。また、他者に方向性を示すことができる。
(6) 企業経営資源に関する専門的知識・技術を身に付けることができる。
(7) 倫理観を養い協調性を身に付けることができる。例えば、インターンシップなどの経験を通して、自己の良心と社会の規範やルールにしたがって行動できる。

2. 学位授与の要件

本学科の教育目標を理解し、124 単位以上の単位取得とその要件ならびに求められる GPA（*1）を満たした上で、課程修了にあたっての修得すべき学修成果を上記の資質・能力について実践を通して理解を深めた人物に学位授与方針に基づき学位を授与します。

（*1）GPA：Grade Point Average の略。授業科目ごとの成績について、例えば 5 段階（秀・優・良・可・不可）で評価した上で、それぞれに対して 4・3・2・1・0 のようにグレード・ポイント（GP）を付与し、その平均を算出して評価を行います。

情報福祉マネジメント学科

教育研究上の目的

豊かで活力ある福祉社会を実現させるため、経営に資するマネジメント能力や情報科学の活用力を兼ね備えた人材を育成する。

教育目標

本学科では、本学の建学の精神である「行学一如」と教育の理念である「自利・利他円満」を実現するために、人や社会のさまざまな問題を掘り起こし、ICT を駆使して、調査・分析・提案・解決できるマネジメント能力に優れたリーダー的人材ならびに福祉マインドを持った創造性豊かな人材の育成をめざしています。

これらの目標を実現するため、以下の教育理念を挙げています。

(1) 「教養教育の重視」: 教養は、人間性を豊かにし、人生そのものに潤いを与えてくれるものです。専門性の高い教育を行う際においても、常に教養教育の視点を忘れずに幅広い人間性の醸成に取り組みます。

(2) 「学際的研究」: 情報科学が取り扱う学問領域は多種多様であり、これを「学際的」と言います。問題を分析・解決するために、特定の学問からのアプローチだけはなく、さまざまな学問領域から多角的に見ることができる人材の育成に取り組みます。

(3) 「問題解決型実践授業」: 社会や地域に存在するさまざまな問題を解決するため、自ら行動・研究し、具体的な解決策を提案・実践できる人材を育成します。

(4) 「現場主義」: 本学の建学の精神である「行学一如」を遂行するためには、積極的に学外に出て現場を見、研究の成果を社会や地域に還元しなければなりません。机上の空論ではなく、常に現場とそこにいる人々に寄り添うことのできる人材を育成します。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

1. 求める学生像

本学科では、このような教育目標と教育理念に共感し、意欲を持って学ぼうとする志を持つみなさんを積極的に受け入れたいと考えています。本学科が求めているのは、以下のような人物です。

(1) 自ら主体的に学ぼうとする人。
(2) 高度な ICT スキルを身に付けたい人。
(3) 人類の幸福の構築にかかわるさまざまな現場で指導的役割を果たす人間へと成長したい人。
(4) 大学の内外で自らの興味や関心をいかして幅広く学べる人。
(5) さまざまな問題について、「情報」と「福祉」の観点から深く考察しようとする人。
(6) 問題を解決するために必要なマネジメントスキルを獲得しようとする人。具体的には、次に挙げる「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度」を備えた人を求めます。また、このような人材を選抜するために、総合型選抜、学校推薦型選抜、一般選抜など、複数の入試制度を設けています。

2. 入学前に培うことを求める力

(1) 知識・技能

① 国語は長文の読解力、基本的な文章作成能力、表現能力を有すること。
② 英語は辞書を用いなくても平易な英文を読める語彙力と文法力を有すること。
③ その他の教科・科目は基礎的レベルの知識と技能を有すること。

(2) 思考力・判断力・表現力等

① ものごとを筋道立てて考え、本質を見極めることに強い関心を抱いている。
② ものごとを正確に認識し、評価することができる。
③ 表現力：芸術・音楽・デザイン・スポーツなどのクリエイティブな活動に興味があり、

自分の考えや思いを他者に伝えることができる。

(3) 主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度

① 自分の夢や目標を持って主体的に学ぶことができる。
② 他者を尊重することができる。
③ 他者と協力して学んだり問題解決したりできる。

3. 評価方法

(1) 知識・技能については、提出書類の活動報告書・調査書・推薦書等の書類審査、学力検査、レポート、プレゼンテーション、小論文により評価します。
(2) 思考力・判断力・表現力等については、提出書類の志望理由書・推薦書等の書類審査、学力検査、レポート、プレゼンテーション、面接、小論文により評価します。
(3) 主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度については、提出書類の志望理由書・活動報告書・調査書等の書類審査、レポート、プレゼンテーション、面接により評価します。

4. 入学前に学習することが期待される内容

入学前に取得しておくことが期待される資格（情報科、商業科、工業科等の生徒のみ）
(1) 全商簿記実務検定 2 級、または日商簿記検定 3 級（商業高等学校の商業科等の生徒）
(2) 全商情報処理検定ビジネス情報部門 1 級（商業高等学校の情報科等の生徒）
(3) 全商情報処理検定プログラミング部門 2 級（商業高等学校の情報科等の生徒）
(4) 全工情報技術検定 2 級（工業高等学校の電子科・情報科等の生徒）
(5) 全工パソコン利用技術検定 2 級（工業高等学校の電子科・情報科等の生徒）

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

本学科では、教育目標と教育理念を達成するために、基盤教育科目、専門教育科目を体系的に編成するだけではなく、講義、実習、演習等を適切に組み合わせ、能動的学修を促進する授業を開講します。カリキュラムの体系を示すために、科目間の関連性を示した履修モデルを作成しています。

教育課程編成、学修方法・学修過程、学修成果の評価のあり方、多様な学生の支援については以下のように方針を定めます。

1. 教育課程編成

(1) 初年次は、「基盤教育」において、人間の社会・文化的活動、心身の健康問題、人間の多様性、科学的な考え方、地域・社会とのかかわりについての学修を通して、幅広い教養知識を学ぶことで、総合的・多角的な見方を身に付けます。本学の教養教育は、特に、現実社会とのつながりや実学・実践を重視した学びを特色としています。また、それらと並行して、本学科では、マネジメントと福祉分野の基礎科目（「専門基礎科目 A 群」）ならびに情報科学の基礎科目（「専門基礎科目 B 群」）の学修によって、専門知識を効果的に身に付けていくために必要な基礎力を養います。さらに、少人数制による演習科目である「リエゾンゼミⅠ」（基礎演習）では、（ア）学びの基本、（イ）キャンパス生活、（ウ）コミュニケーション能力、（エ）情報リテラシー、（オ）キャリア形成等を集中的に学び、学生生活にスムーズに入れるよう指導します。
(2) 2 年次は、「ヒューマンサポートコース」「創造メディアコース」「企業マネジメントコース」に分かれ、各々の履修モデルに沿って基礎科目の学修を完了し、3・4 年次で学ぶ専門科目に備えます。各コースの専門科目（「専門基幹科目 A 群」「専門基幹科目 B 群」「専門基幹科目 C 群」）の履修もこの年次から開始します。また、リエゾンゼミⅡ（専門基礎演習）では、コース担当教員別のゼミ（10 名程度の少人数制）に分かれ、専攻する分野の基礎知識と技術を修得するとともに、問題発見・解決能力とプレゼンテーション能力などの向上を図ります。
(3) 3 年次は、「専門基幹科目 A 群」「専門基幹科目 B 群」「専門基幹科目 C 群」の学修を引き続き行い、専門知識の修得をめざします。リエゾンゼミⅢ（専門演習Ⅰ）では、専門知識・技

術を総合的に活用しながら、自ら積極的に興味を持ち、調査・検討を進め、問題を解決しようとする能動的学修姿勢の獲得をめざします。

(4) 4 年次は、リエゾンゼミⅣ（専門演習Ⅱ）を履修し、卒業論文をまとめます。それまでの学修で得られた知識、技術、思考力を駆使して、自ら見出した問題を解決することで、能動的学修の意義を確認することができます。また、ディスカッションや研究成果のプレゼンテーションを通して、コミュニケーション能力を養成します。

(5) 在学期間を通したキャリア教育では、自らかかわる（主体性)、自ら考える・気付く（課題発見能力等)、自らアクションを起こす（実行力）ことを目標にしています。本学では、リエゾン型キャリア教育というものを開発し、1 年次より社会とのつながりを持って実践的にキャリアアップを進めています。

(6) 情報系の各種資格取得をサポートします。

2. 学修方法・学修過程

(1) アクティブ・ラーニングを取り入れた多様な教育科目を受講することで、初年次から、主体的な学びの力を高めることができます。

(2) 学修ポートフォリオを4年間かけて作成し､自己の学修成果と学生生活を自分自身で管理、振り返ります。また、学内ポータルサイトを活用し、学生と教員の双方向のコミュニケーションを密にすることで学修成果を高めることができます。

(3) 初年次から、問題解決型学習（PBL）に取り組むことで、高度な問題発見・問題解決能力を核とする「人間力」を身に付けることができます。

(4) 情報科学の基礎分野は、講義科目と並行して配置された実習科目を受講することで、より確実な修得ができます。

3. 学修成果の評価のあり方

学修成果の評価方法は、期末試験に加え、理解度を適宜確認するために小テストやレポートを行うことがあります。また、学生が主体的に学修計画、評価が行えるように、リエゾンポートフォリオやルーブリック等を活用します。なお、科目ごとの評価は、シラバスに明記された方法に沿って行われます。

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位の授与に関する方針）

1. 学生が身に付けるべき資質･能力の目標

(1) 知識・技術・理解

① 情報科学の基本的な知識と技術ならびに社会福祉学の基本的な知識を体系的に理解し、文化・社会・自然においてその知識・技術の位置付けについて説明できる。

② 情報科学の知識と技術の活用を通じ、多様な人々の社会的ニーズや文化的な要請に応えうることを示せる。

(2) 思考力・判断力・行動力

① 情報科学の知識と技術を活用し、社会に存在するさまざまなテーマに沿った事実やデータを適切に収集し、数量的な把握・理解に立って正しく論理的な分析を加えることができる。

② 分析結果に基づいて問題を発見し、その解決に必要となる方策を考え、実行に移すことができる。

③ これらの情報収集、分析、問題発見、解決のプロセスを客観的に評価し、身に付けたプレゼンテーションスキルを適切に選択することにより、他者と有効なコミュニケーションを図ることができる。

(3) 態度・志向性

① 自らまたはチームで取り組む情報収集、分析、問題発見・解決と評価において、自己を律しながら責任を持つとともに、良心や社会的規範・ルールに従った行動ができる。

② これらの行動に加え、他者との連携・協力を図りながら、説得力のある意思表明と率先

した行動ができる。
③ 獲得した自己の知識・技術・経験に基づいて創造的に思考することを通じ、新たなニーズの解決に向けた意欲的な努力の継続と、このために必要となる資質を柔軟に発揮できる。
④ 多様な人々の共生社会を、地域的な視点のみならず、グローバルな視点からも見つめることができ、身に付けた知識・技術を活用する姿勢を示すことができる。

2. 学位授与の要件
所定の年限在学し、学びの成果として上述した資質・能力を発揮するために卒業論文などをあらわし、これらの要件が身に付いたと評価される学生に学士（情報福祉学）を授与します。

（*1）GPA：Grade Point Average の略。授業科目ごとの成績について、例えば5段階（秀・優・良・可・不可）で評価した上で、それぞれに対して4・3・2・1・0のようにグレード・ポイント（GP）を付与し、その平均を算出して評価を行います。

教育学部

教育研究上の目的
豊かな教養と人間性を基礎に据え、保育・教育への熱意、高度な専門性、研修意欲等を備え、乳幼児・児童・生徒の保育・教育に柔軟に対応できる人材を育成する。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）
求める学生像
保育・教育にかかわる者として乳幼児・児童・生徒をとりまく日常生活や周辺環境で生じる諸課題を広い視野でとらえ、深く理解し対応できる力が必要になります。そのため入学後の学修や実践に必要な知識を有し、それらを自律的な学修によって伸ばしていこうとする向上心と意欲、保育・教育に貢献していこうとする使命感を有する学生の入学を期待します。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）
問題解決型学習（PBL）や協同学習を積極的に活用し学士力向上をめざしていく科目を配置するのはもちろんのこと、保育士や教員としての情熱や責任感を育み、乳幼児・児童・生徒を理解し一人ひとりの気持ちによりそった対応ができるようになるうえで必要な、保育系・教育系・特別支援教育系の講義・演習・実習などを中心に配置しています。さらに、東北福祉大学のこれまでの実績をいかして、福祉系科目や心理学系科目等も幅広く学び、乳幼児・児童・生徒をさまざまな面から支援する方法を総合的に理解できるカリキュラムになっています。
ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位の授与に関する方針）
「考える楽しさ」「学ぶ喜び」を育てる専門職として、乳幼児・児童・生徒一人ひとりの発達の特性を理解し適切に対応し、学んだ諸能力を現場で効果的・柔軟に発揮して実践を行い、乳幼児・児童・生徒や保護者を受容的に支援しながら、自らの「学び」を土台に、自ら考えたことや実践したことについて省察する能力を有する学生に学位を授与します。

教育学科

教育研究上の目的
乳幼児・児童・生徒の発達の特性を活かした教育を研究するとともに、自らの実践を省察する能力を有する人材育成を目的とする。

教育目標

本学科は、特別な支援を必要とする子どもたちに対応できる資質を基盤にして、幼児教育から中等教育、特別支援教育、さらには生涯学習を含む幅広い教育を学び、さまざまな教育的課題やニーズに柔軟に対応できる実践的指導力のある保育士・教員等を養成することを目標にしています。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

1. 求める学生像

本学科は、多様化複雑化する現代社会において、さまざまな教育的課題に適応できる保育士・教員などの養成を目標としています。そこで求められる資質は高い専門性と柔軟な対応力です。乳幼児・児童・生徒を取り巻く日常生活や周辺環境で生じる諸課題を広い視野で正面から受け止め、深く理解したうえで、適切かつ柔軟に対応できる力が必要になります。そのため、入学後の学修や実践に必要な知識や実技能力を有し、次の点で意欲的な学生の入学を期待します。

⑴ 自然、文化、教育など人間の営みにかかわる諸問題に関心を広げていこうとする人。
⑵ 自分の考えや気持ちを的確に表現し伝えようとする人。
⑶ 積極的に他者とかかわり、対話を通して相互理解に努めようとする人。
⑷ 物事を多面的かつ論理的にねばり強く考えようとする人。

2. 入学前に培うことを求める力

⑴ 知識・技能

① 高等学校までの履修内容について、総合的に身に付けている。
② 多様な背景を持つ人々とコミュニケーションができる基礎的スキルと経験を身に付けている。

⑵ 思考力・判断力・表現力等

① これまで得た知識や技能を現実の社会問題と結び付けて考えることができる。
② 自らの考えや気持ちを他者に的確に伝えるために、話したり文章で述べたりすることができる。
③ ものごとを筋道立てて考えることができる。

⑶ 主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度

① ボランティア活動やクラブ活動などの社会的活動において、子どもからお年寄りまで幅広い世代の人々やさまざまな人々と積極的に交流した経験がある。
② 子どもを取り巻く社会的な諸問題に関心があり、子どもの福祉・幸福に貢献する意欲がある。

3. 評価方法

⑴ 知識・技能については、提出書類の活動報告書・調査書・推薦書等の書類審査、学力検査、レポート、プレゼンテーション、小論文により評価します。
⑵ 思考力・判断力・表現力等については、提出書類の志望理由書・推薦書等の書類審査、学力検査、レポート、プレゼンテーション、ディスカッション、面接、小論文により評価します。
⑶ 主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度については、提出書類の志望理由書・活動報告書・調査書等の書類審査、レポート、プレゼンテーション、ディスカッション、面接により評価します。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

1. 教育課程の編成

本学科は「初等教育（幼保コース、小幼コース、小特コース）」および「中等教育」の２専攻で構成しています。各専攻では、それぞれの専門性を基盤にした実践力を有する保育士や幼稚園教諭・小学校教諭・中学校教諭・高等学校教諭・特別支援学校教諭の他、中等教育専攻では社会教育及

び英語教育関連の従事者養成をめざしています。
各専攻における実践力養成のため、附属の研究施設等と連携し、さらに福祉系科目や心理学系科目などを幅広く学び、乳幼児・児童・生徒をさまざまな面から支援する方法を総合的に理解できるような教育課程を編成しています。

2. 学修方法・学修過程

教育課程の授業科目は、幅広い教養を身に付けることを目的とした「基盤教育課程」と高い専門性とキャリアアップをめざす「専門教育課程」の二つで構成しています。

(1) 初年次教育

1年次には、リエゾンゼミⅠにおいて、講義ノートの取り方やICT を用いたレポートや図表、プレゼンテーションの作成などの「学びの基本」について学びます。また、設定したテーマについてグループワークによるコミュニケーション能力の向上を図るとともに、「教育」の観点からキャリア形成を行っていくなど学生生活にスムーズに入れるような学修を展開します。

(2) 専門教育

「専門教育課程」では、保育士・教員等に必要な、高い専門性を支える基礎・基本を学び、アクティブ・ラーニングや協働学習を取り入れながら「専門性の充実」をめざします。

(3) 特色ある教育（特別支援教育の充実）

特別な支援を必要とする子どもたちに対応できる保育士・教員等を養成するため、専攻・コースにかかわらず、すべての学生に特別支援教育に関する科目を必修化します。障がいがある子ども、情緒面や行動面に問題がある子どもへの具体的な指導については、特別支援教育学校や児童福祉施設などの実践に学びながら、学習支援や家庭支援等についての理解を深めていきます。

(4) キャリア教育

「行学一如」の理念を具現化するために、学生間、学生と教員、学生と学校との連携を重視します。特に、学生が学校現場を「直接体験する教育実践活動」（１～４年次）を推奨し、あわせて保育施設や学校、社会教育施設での実習や教育実践活動、仙台市教育委員会をはじめとする自治体と連携したリエゾン型キャリア教育をとおし「実践的指導力の向上」をめざします。また、さまざまな講義・演習時の実技・実験・調査等により省察力や課題解決能力を養成し、「専門性」と「実践力」の融合を図ります。４年間をとおした学修ポートフォリオの作成などにより、自らの力量を主体的に高めていくとともに、さまざまな場面において、他者と協働していくことのできる保育士・教員等を養成します。

(5) 学生へのさまざま支援

① 保育士、幼稚園教諭、小学校教諭、中学校教諭（社会・英語）、高等学校教諭（地理歴史・公民・英語）、特別支援学校教諭（聴覚・知的・肢体不自由・病弱）の他に、司書教諭、社会教育主事、司書、学芸員などの資格取得のためのサポートを行います。

② 保育士・教員等としての生涯を見据えたキャリア教育を進めます。その一環として、教育実践活動や保育・教育実習への支援を行います。また、保育・学校現場で教職に就いている卒業生との交流の場として「教育フォーラム」を行います。

3. 学修成果の評価のあり方

学修の展開や蓄積の可視化を図るため、ルーブリックや学修ポートフォリオを活用しながら、以下の観点で評価し、それを教育課程の改善にいかしていきます。

(1) 教育科学および発達心理、幼児教育ならびに特別支援教育を中心とした保育・教科教育、あるいは社会教育関連の各専門分野に関する知識・技能を理解・修得しているか。
(2) 保育士・教員等に必要な知識・技能を理解・修得しているか。
(3) 保育・教育等の課題に主体的、協働的に取り組むことができる能力を修得しているか。

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位の授与に関する方針）

1. 学生が身に付けるべき資質・能力

(1) 確実な知識、理解、技能を有し、広い視野を持ち、高度な専門性を備え、実践的な指導力を身に付けた学生

① 乳幼児･児童･生徒理解
乳幼児・児童・生徒一人ひとりの発達の特性を理解し、適切に支援できる知識と能力を備えている。

② 確実な知識、理解、技能
教育学の基礎的な知識を有し、「考える楽しさ」「学ぶ喜び」を育てる専門職として、学んだ知識・技能を高め続けようとする研究心や意欲を備えている。

③ 実践的な指導力
学んだ諸能力を保育・教育現場で効果的かつ柔軟に発揮できる実践的な指導力を備えている。

④ 課題解決能力
教育活動等における課題を把握し、その課題解決に必要な情報の収集･分析･整理をし、その課題の解決ができる。

⑤ ICT 活用能力
ICT を用い、情報収集･分析･プレゼンテーションを適切に行うことができる。

(2) 教育に対する強い使命感と責任感を持ち、豊かな人間性を備えた学生

① 教育に対する使命感と責任感、愛情
教育に対する強い使命感と責任感を持ち、愛情を持って乳幼児･児童･生徒に接することができる。

② 健康な心身と豊かな人間性
心身の健康の大切さを理解し、豊かな人間性に基づいた教育活動を展開できる。

③ 自らの実践に対する省察
自らの「学び」を土台として、自ら考えたことや実践したことについて省察し、新たな課題に立ち向かう柔軟さや粘り強さを備えている。

④ コミュニケーション能力、チームワーク
連携、協働の大切さを理解し、乳幼児･児童･生徒ならびに地域住民や保護者、教職員と連携し、自分と異なる考えを持つ人とも互いに尊重しつつ、教育課題等にチームとして取り組むことができる

⑤ 道徳性と倫理観、社会性
倫理、道徳に関する知識と技能を踏まえ、自らの良心と社会の規範やルールにしたがって行動し、人々の幸せや地域･社会の発展のために貢献できる。

2. 学位授与の要件

「考える楽しさ」「学ぶ喜び」を育てる専門職として、乳幼児･児童･生徒一人ひとりの発達の特性を理解し適切に対応し、学んだ諸能力を教育現場で効果的･柔軟に発揮、さらに自らの学びを土台に、自ら考えたことや実践したことについて省察する能力を有し、本学科所定の単位を修得し、求められる GPA（*1）を満たした学生に学位を授与します。

（*1）GPA：Grade Point Average の略。授業科目ごとの成績について、例えば 5 段階（秀・優・良・可・不可）で評価した上で、それぞれに対して 4・3・2・1・0 のようにグレード・ポイント（GP）を付与し、その平均を算出して評価を行います。

健康科学部

教育研究上の目的
ヒューマニティやノーマライゼーションを基本に、人間を全人的に捉え、「生命の尊重」「人としての尊厳」を基盤にもつ人材を育成することを目的とする。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）
医学・医療について関心を持ち、自らの人間性、社会性、創造性を高め、本学の建学の精神「行学一如」に則り、保健・医療・福祉の領域における専門的知識と実践能力を身に付けることで社会貢献をめざす人材を求めます。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）
充実した総合基礎科目（基盤教育科目）とリエゾンゼミによる人間性、社会性、倫理性の涵養を図り、医学・医療にかかわる基礎知識から専門的知識への学びの展開を行い、技術の修得と実践力向上のための豊富な現場実習への融合を行えるようにします。さらに、課題研究などを設けて、応用的思考や創造力の養成を行います。

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位の授与に関する方針）
社会人としての一般教養と汎用的能力、人間性、倫理性を身に付け、保健・医療・福祉の専門職にふさわしい知識と実践力を備え、卒業に必要な所定の単位を修得した者に学位を授与します。

保健看護学科

教育研究上の目的
すべての人を対象として、ヒューマンケアの思想を、保健・看護の現場で実践できる能力を有する人材を育成する。

教育目標
本学科は、2006 年に実践力の高い看護職者を養成することをめざして設置されました。建学の精神である「行学一如」と教育の理念である「自利・利他円満」のもと、保健・医療・福祉の場で理論と実践を融合させ、看護職者として豊かな教養を備え、自ら人間性を磨くことができ、人々の健康と福祉の向上に、より実践的に貢献できる人材を育成することを目標としています。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）
1. 求める学生像

豊かな人間性と倫理観を備えるとともに科学的な思考力、理論と実践を融合させる能力を持ち、より実践に強い看護師と保健師と助産師を養成するために、次のような学生を求めます。

(1) やる気があり元気な人（やる気）。
(2) 目標に向かって努力できる人（努力）。
(3) 人の悲しみやよろこびを感じられる人（感受性）。
(4) 人に対する関心や思いやりを持つことのできる人（思いやり）。
(5) 誰にでも気持ちよく挨拶できる人（挨拶）。
(6) 人の健康と幸せについて関心を持っている人（関心）。
(7) 高校までに学んだ基本的な知識を有効に活用できる人（基礎学力）。

2. 入学前に培うことを求める力

(1) 知識・技能

① 学習の基本となる文章読解能力、作成能力を身に付けている。さらに、生物や化学の基本的な知識を身に付けている。
② わからないこと・できないことは何度も繰り返し学習し、理解し、できるようにする力を身に付けている。日常生活の中で、基本的な家事を行うことができる。

(2) 思考力・判断力・表現力等

① 人の悲しみやよろこびを感じ共感することができる。
② 物事を筋道たてて考えることができる。

(3) 主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度

① 自分の目標を持って意欲的に学ぶことができる。
② 他者に関心を持ち、他者を尊重することができる。
③ 他者と協力して課題に取り組むことができる。
④ 元気に挨拶し、周囲の人々を明るくすることができる。

3. 評価方法

(1) 知識・技能については、提出書類の活動報告書・調査書・推薦書等の書類審査、学力検査、レポート、小論文により評価します。
(2) 思考力・判断力・表現力等については、提出書類の志望理由書・推薦書等の書類審査、学力検査、レポート、ディスカッション、面接、小論文により評価します。
(3) 主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度については、提出書類の志望理由書・活動報告書・調査書等の書類審査、レポート、ディスカッション、面接により評価します。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

1. 教育課程編成

総合基礎教育科目と専門教育科目に大別されており、看護について系統的・段階的に学修していきます。講義の中で基礎的な知識を学び、演習や臨地実習では、科学的・論理的な思考と相手を思いやる想像力と心遣い、創造的で確かな技術を学んでいきます。

(1) 総合基礎教育科目においては、建学の精神を基調として、総合的・多角的な見方を身に付けるとともに専門の基礎および社会人基礎力を学修します。
(2) 専門教育科目は、専門基礎科目と専門基幹科目で構成しています。専門基礎科目は、基礎医学系、臨床医学系、保健学系、福祉学系、生活文化学系に系統立てており、看護を学ぶ上での基礎的な知識体系を学修します。
(3) 専門基幹科目は、リエゾン系、看護の基礎、生涯看護学、在宅看護学、看護の統合に系統立てており、看護実践能力の基本を学修します。
(4) 公衆衛生看護学は、1 年前期から専門的講義が始まり、2 年次終了時選抜試験をうけ保健師教育課程に進みます。これにより、保健医療福祉分野において専門職として活躍・多職種と協働する能力を養います。
(5) 助産学は、1 年前期から専門的講義が始まり、3 年次終了時選抜試験をうけ助産師教育課程に進みます。これにより、助産師として専門的に実践する能力を養います。

2. 学修方法・学修過程

(1) 講義は、1 年次は総合基礎教育科目と、看護学原論や人体の構造と機能など、看護を学ぶ上で基盤となる科目を学修します。2 年次・3 年次は看護の専門領域の概論と援助論を学修します。
(2) 演習は、看護技術や対象への支援方法などについて、基本的なことから専門的、複雑なことにレベルを上げて学修していきます。
(3) 臨地実習は､1 年次では臨地実習の基本となる態度･技術と看護職者の役割･機能について、2 年次では看護の専門的な思考過程について、3 年次では看護の領域別に専門的な援助方法ついて、4 年次では学んできたこと看護の知識・技術・態度を統合する実習を行います。
(4) 臨地実習は、基本的に少人数のグループで行い、その学生の学修進度に合わせた学びを行

うことができます。

3. 学修成果の評価のあり方

科目ごとに、出席状況、授業態度、レポート課題、筆記試験などを踏まえ、総合的に評価します。特に、演習科目や臨地実習ではルーブリック評価を行っています。学生自身が、何をどこまで学ぶことができたのか一目瞭然となります。また、リエゾンゼミⅠから始まる学修ポートフォリオは、4 年次まで継続され、4 年間で学士力をどこまで身に付けたのか、学生自身が自覚できるように工夫しています。

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位の授与に関する方針）

1. 学生が身に付けるべき資質・能力の目標

本学科では、社会人としての一般教養と汎用的スキルを学修しながら、看護の専門的知識・技術・態度を修得していきます。卒業時の到達目標は以下のとおりです。

(1) 人間理解に基づき、人の悲しみやよろこび、痛みを感じとり、対象の気持ちに寄り添う態度が身に付いている（人間理解）。
(2) 対象の生命の尊厳と権利を理解し、それらを尊重する態度が身に付いている（生命の尊厳）。
(3) コミュニケーション技術を使って、人間関係を円滑に保つことができる（コミュニケーション技術）。
(4) 対象の健康問題を解決するための科学的・論理的な思考力と基本的な知識・技術を持ち、根拠に基づいた基本的な看護を実践することができる（科学的・論理的思考）。
(5) 看護職の専門性を認識しながら、連携チームの中で役割を果たそうとする態度が身に付いている（協働）。
(6) 対象の環境、立場および価値観の理解に基づき、多文化の中にある多様な対象に働きかけることができる（多様性）。
(7) 社会や状況の変化に伴って生じる健康問題に対応し、対象に必要な看護を創造することができる（創造性）。
(8) 看護職者としての倫理観を持ち、誠実に看護を実践する態度が身に付いている（倫理観）。
(9) 自分の能力を見出し、自分の力を信じ、目標に向かって努力する態度が身に付いている（努力する態度）。

2. 学位授与の要件

本学科所定の 125 単位以上を修得し、求められる GPA（*1）を満たし、上記に示す能力を有する学生に学位を授与します。

（*1）GPA：Grade Point Average の略。授業科目ごとの成績について、例えば 5 段階（秀・優・良・可・不可）で評価した上で、それぞれに対して 4・3・2・1・0 のようにグレード・ポイント（GP）を付与し、その平均を算出して評価を行います。

リハビリテーション学科

教育研究上の目的

専門職となる医療現場に加え、「保健・福祉現場における地域リハビリテーション」を視野に入れた、健康増進・障害予防に関わるヘルスケアなど「理論と実践の融合」による調和のとれた人材を育成する。

教育目標

本学科は、作業療法学専攻と理学療法学専攻の 2 専攻で構成され、対象者の自立と社会参加を促し、より豊かな生活を創造することに寄与し、人類の幸福に貢献できる人材の育成を目標としています。

本学の建学の精神「行学一如」を前提に、高度な専門知識と技術を修得すると同時に、生命の尊厳と生活の質を重視した高い倫理観と感性および調和のとれた人間関係を築く能力を培い、全人間的復権をめざし、保健・医療・福祉・教育・行政等において包括的なリハビリテーションを実践できる作業療法士ならびに理学療法士を養成することです。
そのために 4 年間の教育課程の中で、教育目標として、創造性、主体性、人間性、専門性、協調性、社会性を掲げ、広い視野に立ったヒューマンケアが実践できる事をめざしています。ヒューマニティやノーマライゼーションの思想は、人間を全人的に捉え・支えるための基本的な理念であり、そのことが「生命の尊重」「人としての尊厳」の基盤となります。21 世紀のリハビリテーションにおける専門職は、個人的な専門性の追求のみでなく、対象者を「人として尊重する」視点がより重要であり、関連する人々や組織との連携を持ちながら、その人らしい生活を構築できるように支援できる資質が求められ、以下の目標を掲げ教育を行っています。

1. 創造性：未来の課題に対して、既成概念にとらわれることなく、主体的かつ創造的に探究することのできる力を養う。
2. 専門性：社会の信頼と養成に応えられる専門的知識と技術を修得し、保健・医療・福祉における諸問題に対して実践的に対応できる能力を養う。
3. 主体性：自らが自らの知識・技術・態度を評価し、絶えず向上しようとする自己研鑽力を養う。
4. 協調性：広い視野を持ち、保健医療福祉システムの中で、他の専門職者と連携・協働しつつ、自分の役割と責任を担う能力を養う。
5. 人間性：人間の存在する意味を理解し、個人の尊厳と基本的人権の尊重に基づき活動できる人間性と倫理性を養う。
6. 社会性：実践教育の重要性を踏まえ、1 年次の早期体験実習や見学実習から始まり、評価実習、実践実習で実践力を修得し、自らの役割と責任を担う能力を養う。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

1. 求める学生像

保健・医療・福祉の専門職を養成することから、次の点で意欲的な学生の入学を期待しています。

(1) 人間の存在する意味を理解し、個人の尊厳と基本的人権の尊重に基づく活動ができる人間性と倫理性のもと、社会の信頼と要請に応えられる専門的知識と技術を修得し、保健・医療・福祉における諸問題への実践能力の向上のため、作業療法学あるいは理学療法学の知識や技術をいかしたい人。
(2) 広い視野を持ち、保健医療福祉システムのなかで、他の専門職者と連携・協働しつつ、自分の役割と責任を担う人間関係を構築できる人。
(3) 未来の課題に対して、既成概念にとらわれることなく、専門職として高度な知識と技術を修得するため、科学的探究心、協調性、使命感を持ち、主体的かつ創造的に探究することができる人。
(4) 自らの知識・技術・態度を評価し、絶えず向上しようと自己研鑽ができる人。

〈作業療法学専攻〉

ひとの生活を支援することから傾聴や自ら語りかける姿勢や親しみやすい人柄などの人間性と、高い責任感、使命感、科学的思考や探究心を持った学生を求めています。入学後、医学的知識基盤を持つ必要性から理系科目への関心を有し、しっかりと学ぶ姿勢のある学生の入学を期待します。

(1) 単に心身機能の改善をめざすのみでなく、その人らしい生活や生き方を尊重できる人柄で、作業療法の対象となる方々が、身体障がいのある方のみならず、認知症や精神障がいのある方とのかかわりを持つことから、人とかかわることが好きで、素直で明るく人の気持ちや思いを大切にできるような人柄を備えている。さらに、作業療法士としての目的意識と情熱を持ち、社会的に信頼される専門職としての技術を修得し、保健・医療・福祉に対する意欲や関心が高く、社会に貢献しようとする意識の高さがある。
(2) 広い視野を持ち、保健医療福祉のシステムの中で、リハビリテーションチームの一員とし

て、他の専門職種と協調性を持って連携・協働しつつ、自分の考えや行動に責任を持ち、適切な人間関係を構築できる。
(3) 作業療法士をめざす者として、さまざまな未来の課題に対して、既成概念にとらわれることなく、専門職として自らが抱える課題を掘り下げて追究するための深い洞察力を持ち、高度な知識と技術を修得するため、科学的探究心や基礎学力を培う。知識を詰め込むだけではなく、主体的に実践から学ぶことも含めて、包括的に創造することができる。
(4) 適切に自己評価ができ、生涯にわたって自己啓発・自己研鑽・(自己の健康増進) を継続する意欲がある。

〈理学療法学専攻〉
本専攻では、本学の「建学の精神」を理解し、理学療法の基盤となる専門科目に強い関心と探究心を持ち、理学療法士になりたいと強く希望する意欲的な学生の入学を期待し次のような学生を求めます。
(1) 人、生命に対する倫理観を持ち、理学療法の対象となる方々に対し共感的な態度で、敬意と慈しみの気持ちを持ち、障がいを持つ方たちの回復、支援をしたいと思う気持ちがある人。
(2) 健康を意識し、人体の構造・機能に興味を持ち、心身機能、生活の活動を高め、障がいや病気の予防の大切さを理解し、対象者の方々が抱えるさまざまな問題や課題に対応できる知識や技術を身に付けるために十分な基礎的学力を有し、理学療法の専門的知識や技術を修得し実践的にいかし社会貢献したい人。
(3) 質の高い医療の提供や安全性向上のために、福祉・医療・保健の領域でリハビリテーションチームの一員として、協調性、柔軟性を有し、誰とでも良好な人間関係を保ち、責任ある行動をとることができる人。
(4) 質の高い医療の提供や安全性向上のために、身体の機能や病気・障がいについて、不思議に思うことやもっと知りたいという気持ち、人のためになるようにという使命感を持ち、主体的に行動し、深い探究心と観察力、洞察力を備え、障がい予防から治療、生活機能、社会参加等総合的なリハビリテーションの領域の課題を創造していくことができる人。
(5) 自分自身について評価し、生涯にわたり絶えず向上しようと自己研鑽ができる人。

2. 入学前に培うことを求める力

(1) 知識・技能
① 高等学校までの履修内容を身に付けている。特に専門基礎科目・専門基幹科目の理解には、基礎的な理系科目の知識が必要であり、生物、化学、物理についての基本的な知識を身に付けている。
② 自分の考えを文章化する力、文章の読解力を身に付けている。

(2) 思考力・判断力・表現力等
① 多種多様な対象者の方とかかわり支援を行うリハビリテーション専門職として、誠実さ、優しさ、素直さなど豊かな人間性を身に付けている。
② さまざまな情報を整理し、その関連性をもとに自分の考えをまとめ、表現できる。
③ 自ら課題に対し解決する方法を探し、解決する努力ができる。

(3) 主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度
① チーム医療を担う職種であり、良好な人間関係を築くためコミュニケーション能力を身に付けている。
② 責任ある行動を取ることができる。
③ 立場の違い、考えの違いについて理解できる柔軟な考え方を身に付けている。

3. 評価方法
(1) 知識・技能については、提出書類の活動報告書・調査書・推薦書等の書類審査、学力検査、レポート、小論文により評価します。
(2) 思考力・判断力・表現力等については、提出書類の志望理由書・推薦書等の書類審査、学力

検査、レポート、ディスカッション、面接、小論文により評価します。
(3) 主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度については、提出書類の志望理由書・活動報告書・調査書等の書類審査、レポート、ディスカッション、面接により評価します。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

1. 教育課程編成

本学科のカリキュラムは、基盤教育科目、専門基礎科目、専門基幹科目に大別されており、リハビリテーション専門職として必要な知識・技術に関し、講義、演習、実習ならびに臨床実習を各学年に配置した教育過程を編成しています。

(1) 作業療法学ならびに理学療法学の知識および技術を修得するため専門教育と臨床教育を 1 年次より配置しています。
(2) 豊かな教養やコミュニケーション能力を養成するため１・２年次を中心に「リエゾンゼミ」ならびに「基盤教育科目」を配置しています。
(3) 医療専門職として必要な医学的な基礎知識の修得のため、１年次２年次を中心に専門基礎科目にある「人体の構造と機能」「疾患と障害学」「保健医療福祉とリハビリテーションの理念」、また専攻毎に「基礎作業療法学」「基礎理学療法学」を配置しています。
(4) 科学的な根拠に基づいた評価や治療プログラムを構築し、臨床実習において活用・応用ができるように専攻毎に専門基幹科目にある「評価学」「治療学」を 2 年次・3 年次に配置しています。
(5) 地域での活動の理解のため、専門基幹科目にある「地域作業療法学」「地域理学療法学」を３年次に配置しています。
(6) 年次毎で学んだ知識・技術の統合を目的に「臨床実習」を各学年に配置しています。
(7) 専門職として生涯学習の礎となる創造的思考力や自己研鑽力を身に付けるため､3 年次 4 年次に「研究法」や「卒業研究」を配置しています。

2. 学修方法・学修過程

〈作業療法学専攻〉

(1) 作業療法の技術・知識修得のため、初年次の人間教育に始まり、学内での専門教育、実践の現場での臨床教育、さらには科学的探究心を深める卒業研究や国家試験対策へと年次進行での積み上げ型のカリキュラムで構成しています
　① 積み上げ教育の中ではコミュニケーション能力や豊かな教養を身に付け（人間教育）、医学や作業療法の知識・技術などを修得（医療職としての知識と専門教育）し、学内で学んだことを作業療法の実践の場で体験（実践力、協働）しながら、プレ臨床家として資質（知識と実践の統合）を得る機会を設けています。
　② 作業療法の専門科目では、障がいの特性別に総論から各論に授業が組まれ、各論では作業療法評価および作業療法学の介入に関して講義と演習を交えながら学びを深化できるように科目を配置しています。
(2) 専門家教育としての臨床教育を重視した臨床実習を実践します。
　１年次での Early Clinical Exposure（早期臨床体験実習）としての早期体験実習に始まり、2 年次には作業療法を体験する実習（作業療法体験実習）、3 年次に評価を経験する実習（作業療法評価実習）、評価と介入を体験する実習（作業療法実践実習Ⅰ）、4 年次に対象者の生活を考えた作業療法を実践する実習（作業療法実践実習Ⅱ）、対象者の地域支援を学ぶ実習（地域生活支援実習と学生が修得すべき内容に応じて段階的に実習を配置しています。
(3) 人間力・学士力を養成するために 4 年間を通してリエゾンゼミを実施します。
　① 作業療法士として必要とされる知識・技術以外に、コミュニケーション能力を含む臨床家としての適切な態度が身に付くように、対象者の思いをくみ取れるような人間性、他者と協力できるような協調性、自ら行動し責任を果たすような主体性について 4 年間を通し学修する機会を設定します。

② バランスのとれた人間教育から、高度な専門知識と技術教育、探究心と行動力を培う実践教育へとつながるよう、また、学年が進むにつれ、より臨床実習を想定した課題を設定します。

(4) 知識と実践の統合機会を多く設定します。

① 学内教育では、講義等により得られた知識を、問題解決型学習（PBL）を活用したグループワークの中で、学生同士が討議し、臨床で使える知識に統合する機会を設けています。

② 学内教育の講義や演習で得た知識と技術は、各学年で実施される臨床実習と実習後のセミナーで実践し統合する機会を設けています。

(5) 医療専門職としてのみならず、地域で活躍できる人材となるような教育を提供する。

① 地域作業療法学の講義や演習で知識や技術を得、4 年次では地域生活と住環境の選択科目により地域での支援を考えた科目を設けています。

② リエゾンゼミ、臨床実習、臨床実習に関連して実施されるその他のゼミ活動を通し、社会人としての社会性を学ぶ機会を設けています。

(6) 専門職として常に疑問を持ち、その疑問を解決するための方法を知ることや、自己研鑽をするための基礎を学ぶ

① 疑問に感じられた課題を解決するための一つの手段として、卒業研究として取り組む機会を設定する。ここでは、専門職として必要な創造的思考や理論的思考を学修する機会を設けています。

② 専門職は常に新しい知識や技術を得るために、情報収集が必要とされるためその取り組み方を作業療法研究法で学修する機会を設けています。

〈理学療法学専攻〉

リハビリテーションの専門職として、保健・医療・福祉分野で活躍できる人材育成を目的に、質の高い知識・技術修得、学士力向上のため段階的に進めるよう、学修の系統性や順次性など配慮し、上級学年へつなげるようカリキュラムを編成しています。

(1) 「基礎学力」、「専門的な知識」を持ち、自らそれを継続的に高めていく力。また、それらの上に応用力として構築される「論理的思考力」、「創造力」などの知的能力的要素を有し、科学的な根拠に基づいた評価や治療プログラムを構築し、臨床実習において活用・応用ができるように、専門基礎科目、専門基幹科目を階層構造化しカリキュラムを配置しています。

(2) 初年次教育として、身体機能の専門職としての知識と技術の修得と、豊かな人間性と教養を持ち、医療チームの中での自分の役割と責任を遂行できることを目的としコミュニケーション能力向上や学士力養成のための「リエゾンゼミ」、「人体の構造と機能」を中心とした専門基礎科目を配置しています。

(3) 2 年次から 4 年次にかけては、初年次での基礎知識の理解・経験を基に、病態や障害像を理解し把握するため「疾患と障害学」、「理学療法評価学」ならびに「理学療法治療学」等の専門基幹科目を学修します。また、地域における活動理解のため「地域理学療法学」や臨床での問題・課題解決の過程について演習を通して学修します。

(4) 高度で専門的な知識・技術の修得を段階的に進めるよう、学年ごとの学びの到達レベルに合わせた「臨床実習」を配置しています。

① 1 年次は、専門知識の臨床場面での実際を見聞することで、自らが選んだ理学療法士という専門職としての自覚、内的動機付けを意図して見学実習を配置しています。

② 2 年次には、病態や障がい像の理解を中心とした学内教育をもとに、実践的な情報収集活動、面接や行動観察、各種検査等の実際を体験し、病態や障害像について分析、統合・解釈の仕方を学ぶ理学療法評価実習を配置しています。

③ 3 年次には、評価実習の実践をもとに、得られた情報を分析、統合・解釈し、問題点を抽出し、治療目標を設定、治療プログラムの立案に至る臨床推論過程を経験する機会として理学療法実践実習Ⅰを配置しています。

④ 最終学年の 4 年次では、前回の実習をさらに発展させ自らが実施した理学療法評価に基づく理学療法治療プログラムの実施を経験し、推論過程の妥当性の吟味、プログラムの修正等を経験し医療従事者としての資質を高めるとともに、専門職として知識と技術を

統合する目的で理学療法実践実習Ⅱを配置し、対象者の生活支援のための方策を学ぶ値域理学療法実習を配置しています。

(5) 理学療法における研究を積極的に推進し、理学療法士として生涯学習の礎となる創造的思考力や自己研鑽力を身に付けるため、3 年次 4 年次に「専門演習」、「理学療法研究法」および「卒業研究」を配置しています。

3. 学修成果の評価のあり方

科目毎の達成目標に応じ、実技試験、記述式試験、レポート等により総合的に評価します。臨床実習は、履修要件ならびに実習課題遂行状況について評定基準を基に実施します。

4. 学修支援

担当教員による学年開始時期（4～5 月）、中間（9～10 月）に個別面接を実施し、また必要に応じ面接を実施し学修状況や心身面の状況の把握を行います。学修支援が必要な学生に対しては、個別もしくはグループ学習にて担当教員が支援を実施しています。

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位の授与に関する方針）

社会人としての一般教養、人間性や倫理性を身に付け、また保健・医療・福祉におけるヘルスケアを担うための知識と技術を身に付け、卒業後に専門職として活躍できる実践力と自己研鑽するための研究能力を磨き、広く社会に貢献できる人材になることを求めています。

1. 学生が身に付けるべき資質・能力

(1) 人間性

対象者ならびにその関係者に対し、個人の尊厳と基本的人権の尊重に基づき、配慮し活動できる人間性と倫理感を持つことができる。

(2) 専門性

基礎的知識：基本的な医学的知識を用い、人体の構造・機能について説明できる。

専門的知識：一般臨床医学の知識を用いて、心身機能にかかわる病因・疾病・障がいについて説明ができる。

応用的知識：基礎的・専門的知識を用いて、対象者の問題点、その原因を統合・解釈し必要な治療プログラムを立案する。

実践能力：それぞれの臨床実習内で、評価、治療プログラムの立案、治療プログラムの実施を指導者のもとで実践することができる。

(3) 社会性

専門職として求められる役割とその責任を自覚することができる。

(4) 協調性

コミュニケーション能力：さまざまな問題を抱える対象者ならび関係者の話を傾聴する。また、チーム医療をなす構成員の専門性を理解し、その意見を尊重しコミュニケーションを取ることができる。

チーム医療：チーム医療の一員であり、他の専門職者と連携・協働しつつ、対象者の持つ医学的、社会的問題対する情報を共有し、目標を達成するため自分の役割と責任を担い行動できる。

(5) 創造性

既成概念にとらわれることなく、主体的かつ創造的に探究することのできる力として、論理的思考力、問題解決能力を身に付ける。

論理的思考力：心身機能に関する基礎・専門知識とともに、社会的側面をも捉え包括的に対象者の問題を分析することができる。

問題解決能力：対象者の問題を分析、解釈をすすめ、医学的・社会的アプローチを立案し、実践することができる。

(6) 主体性

自らの知識・技術・態度を評価し、絶えず自己研鑽をすることができる。

〈作業療法学専攻〉

(1) 人間性
作業療法の対象者やその家族の生活におけるニーズや幸福を最優先に考え、対象者やその家族および関係者と良好な人間関係を築くことができる。

(2) 専門性
基本的な医学的知識や一般臨床医学および作業療法実践に必要な専門知識を用いて、対象者の望む生活を支援するために、生活機能の維持、改善を図るための作業療法を実践できる。

(3) 社会性
社会人としての常識を踏まえ、法令遵守の下、作業療法士としての役割を認識し、保健・医療・福祉の向上に寄与できる。

(4) 協調性
対象者のニーズや幸福を追求するために、対象者や関係者と十分な連携とコミュニケーションをとることができる。

(5) 創造性
対象者個々の生活におけるニーズや幸福を追究するために、包括的な視点で課題を分析し、対象者の多様な可能性を柔軟に思考できる。

(6) 主体性
作業療法士として、社会人として、常に自身の資質を向上するために、自己研鑽することができる。

〈理学療法学専攻〉

(1) 人間性
対象者ならびにその関係者に対し、個人の尊厳と基本的人権の尊重に基づき配慮し活動できる豊かな人間性と倫理感を持つことができる。

(2) 専門性
基礎的知識：基本的な医学知識を用い、理学療法士として必要な人体の構造・機能等専門基礎知識について説明することができる。
専門的知識：一般臨床医学の知識を用いて、心身機能にかかわる病因・疾病・障がいについて説明することができる。
応用的知識：理学療法士として必要な基礎的・専門的知識を用いて、対象者の問題点、その原因を根拠に基づく論理的思考を持って統合・解釈し必要な治療プログラムを立案することができる。
実践能力：理学療法士として必要な客観的・論理的思考能力を養うために、それぞれの臨床実習で、評価、治療プログラムの立案、治療プログラムの実施を指導者のもと実践することができる。

(3) 社会性
社会の要望に応え、理学療法士として求められる役割とその責任を自覚し、保健・医療・福祉の向上を通じて地域社会に貢献することができる。

(4) 協調性
コミュニケーション能力：さまざまな問題を抱える対象者ならび関係者の話を傾聴する。また、チーム医療をなす構成員の専門性を理解し、その意見を尊重しコミュニケーションをとることができる。
チーム医療：チーム医療の重要性を理解し、理学療法士として他の専門職者と連携・協働しつつ、対象者の持つ医学的、社会的問題に対する情報を共有し、目標を達成するため専門職としての役割と責任を担い行動できる。

(5) 創造性
既成概念にとらわれることなく、主体的かつ創造的に探究することのできる力として、理学療法学の科学性と創造性を発揮して人や社会の健康的な生活に貢献する論理的思考力、問題解決能力を身に付ける。

論理的思考力：心身機能に関する基礎・専門知識とともに、社会的側面をも捉え包括的に対象者の問題を分析することができる。
問題解決能力：対象者の問題を分析、解釈をすすめ、医学的・社会的アプローチを立案し、実践することができる。

(6) 主体性
自らの知識・技術・態度を評価し、自律的に行動し絶えず自己研鑽をすることができる。

2. 学位授与の要件

本学科の教育目標を理解し、各専攻が定める所定の 124 単位以上を取得し、求められる GPA (*1) が 1.5 以上を満たした学生に学位を授与します。

（*1）GPA：Grade Point Average の略。授業科目ごとの成績について、例えば 5 段階（秀・優・良・可・不可）で評価した上で、それぞれに対して 4・3・2・1・0 のようにグレード・ポイント（GP）を付与し、その平均を算出して評価を行います。

医療経営管理学科

教育研究上の目的

保健・医療・福祉の経営に役立つ管理的知識と医学的知識を有し、医療情報を活用しうる専門的な人材を育成する。

教育目標

地域の健康・医療を支えるプロフェッショナルを養成

私たちがともに健康で心豊かな暮らしができる社会を実現する(「自利・利他円満」の理念)ため、「行学一如」の建学の精神で、地域の健康・医療に貢献できる人を育てます。
具体的には、インターンシップやボランティア活動、防災に関する活動などのさまざまな実社会体験と、健康・医療の知識とを結び付ける教育プログラムを通して、地域の持続的な発展を支える「職業人」になることを目標とします。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

1. 求める学生像

(1) 興味・関心：医療・いのちにかかわる仕事に憧れている人。
(2) 奉仕の心：他者のため、社会のために役立つ人間になりたい人。
(3) 主体性：自ら感じ、学び、考え、行動しようとする態度を有している人。

2. 入学前に培うことを求める力

(1) 知識・技能
① 健康や医療に関する基礎的知識（保健体育などの学習内容）を身に付けている。
② 校内活動、地域活動やボランティア活動などの経験を有している。

(2) 思考力・判断力・表現力等
① 健康や医療に関する話題に対して、自らの考えを述べることができる。
② 校内活動、地域活動やボランティア活動などの活動内容や関心を持った理由を具体的に述べることができる。

(3) 主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度
① 何かに楽しさや面白さを見出して、自ら取り組んでいる。
② 上記の取り組みから何を見出せたかを述べることができる。

3. 評価方法

(1) 知識・技能については、提出書類の活動報告書・調査書・推薦書等の書類審査、学力検査、

レポート、プレゼンテーション、小論文により評価します。
(2) 思考力・判断力・表現力等については、提出書類の志望理由書・推薦書等の書類審査、学力検査、レポート、プレゼンテーション、面接、小論文により評価します。
(3) 主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度については、提出書類の志望理由書・活動報告書・調査書等の書類審査、レポート、プレゼンテーション、面接により評価します。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

日常の学修・練習によって身に付けた技能や知識を基礎として、実社会で活躍できる豊かな素養へと高めることをめざした編成を行っています。

1. 学修方法・学修課程

(1) 興味・関心をキャリア形成につなげる
① 初年次から医療機関や企業等での仕事を体験し、現場で何が求められるのかを学びます。
② 人体の基本的な構造と機能について学び、医療制度・社会保障制度など、私たちの健康を支える社会のしくみと関連付けます。
③ 各種の技能検定・資格認定のための専門教育を行うとともに外部テストを実施し、実社会で使える標準的・実践的な知識・技能を修得します。

(2) 奉仕の心から福祉の心を育む
① 初年次より福祉ボランティア活動、地域共創活動などに参加し、地域の人々とともに地域の活性化に主体的にかかわります。
② 地域における健康増進活動に参加し、健康について実践から学びます。
③ スポーツやサークル活動等の課外活動への参加を奨励し、他者とのさまざまなかかわりを通して対人関係能力を磨きます。

(3) 主体性を発揮し実社会で活動する
① 禅を体験し、心身の調整法・鍛錬法を体得します。
② 学生生活を通して、継続的にスポーツや文化活動、ボランティア活動、地域貢献プロジェクト等に取り組み、実行力、考察力、課題解決能力を養います。
③ 学修ポートフォリオを活用し、自身の活動の振り返りや達成度評価を行って、持続的な成長サイクル（PDCA）を身に付けます。

2. 学修成果の評価のあり方

講義科目については、シラバスに記載されている到達目標の達成度で評価します。各種の体験学修や自主学修、課外活動などについては、学修ポートフォリオやルーブリックを用いて目標の達成度を判定し、学生個人の「伸び」を評価します。

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位の授与に関する方針）

多種多様な学修経験を積み重ね、所定の単位を取得し、学修成果として以下のいずれかを獲得した学生に卒業を認定し、学位を授与します。学修成果は、各種実践活動に対する第三者評価や、学修ポートフォリオに基づく個々の成長度・到達度から評価します。

1. 学生が身に付けるべき資質・能力の目標

(1) 医療専門職としての使命を全うできる資質・能力
医療専門職としての使命を全うできる態度・知識・技能が身に付いており、医療事務や救急救命士などの資格認定試験に合格できるレベルを有する。

(2) 職業人としての資質・能力
サービスを受ける側から提供する側への意識の切り換えができ、他者の喜びから自らの喜びや価値を見出すことができる。

(3) 生涯学習への意欲
時代の変化や社会の多様性に対して常に関心を持ち続け、生涯を通して主体的に学習し、自らを高めるための意欲と成長の道筋を示すことができる。

上記の（1）は学力の 3 要素の「知識・技能」、(2)、(3) は「思考力・判断力・表現力等」および「主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度」の各要素を発展、向上させたものです。

2. 学位授与の要件

本学科所定の単位を修得し、求められる GPA（*1）を満たし、さまざまな学修経験の積み重ねによる学修成果として上記のいずれかを獲得した学生に卒業を認定し、学位を授与します。学修成果は、各種実践活動に対する第三者評価や、学修ポートフォリオに基づく個々の成長度・到達度から評価します。

（*1）GPA：Grade Point Average の略。授業科目ごとの成績について、例えば 5 段階（秀・優・良・可・不可）で評価した上で、それぞれに対して 4・3・2・1・0 のようにグレード・ポイント（GP）を付与し、その平均を算出して評価を行います。

大学院
総合福祉学研究科

教育研究上の目的

本学大学院は、建学の精神に則り、人間科学に関する精深な学術の理論と応用を研究教授し、その深奥を究めて、文化の発展と人類の福祉に寄与しうる人材を育成することを目的としています。
＜修士課程＞
本学の学部における一般的ならびに専門的教養の上に、さらに広い視野に立って精深な学識を授け、社会福祉学専攻においては、高度な専門知識を有する人材の養成を目的としています。また、福祉心理学専攻においては、高度な専門知識を有する人材の養成と、研究者の養成、臨床心理士、公認心理師の養成を目的としています。
＜博士課程＞
専攻分野について研究者として自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力およびその基礎となる学識を養うことを目的としています。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

すべての人がよりよく生きること(well-being)を可能にする共生社会の実現に寄与したいという熱意を持ち、社会福祉学、福祉心理学の知識・技術を高めるための研究する力、実践する力を身に付けたいという学生の入学を希望します。
博士課程においては、特に社会福祉学分野での自立した研究者となることをめざす学生の入学を希望します。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

共生社会の実現と人類の福祉へ貢献する人材の育成という本研究科の教育研究上の目的の下、社会福祉学と福祉心理学に関する高度な専門知識・技術と、その基盤となる理論を学修します。社会と人間にかかわる諸問題に対する視点、その解決のための方策を理論的に学修し、修士学位請求論文としてまとめます。
博士課程においては、社会福祉学研究に必要な方法を学修し、博士学位請求論文の作成を行います。

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位の授与に関する方針）

現代社会とそこで暮らす人々が直面するさまざまな問題を発見、解決し、共生社会の構築をめざすための研究能力、高度な専門性を有すると認められたものに「修士(社会福祉学)」および「修士(福祉心理学)」を授与します。
博士課程においては、社会福祉学研究に必要な方法を学修し、博士学位請求論文の審査に合格し

たものに「博士（社会福祉学）」の学位を授与します。

社会福祉学専攻

教育研究上の目的

本専攻は、本学の建学の精神である「行学一如」を基盤とし、「自利・利他円満」を教育の理念として、高度な研究倫理観と卓越した専門知識・技術を有する研究者や実践者の養成を目的としています。

教育目標

社会福祉学の修士課程には、社会福祉に関連する分野についての理論、制度･政策、実践を全般的に学ぶことができます。また、災害福祉論研究や認知症ケア研究などの領域を設け、博士課程への展開を誘導しています。社会福祉学の博士課程では、社会福祉に関連する分野についての修士課程を修了した人を対象に、さらに研究者として高等教育機関や社会福祉に関連する研究所等において自立して研究活動を行うに必要な研究や知識の修学を目標としています。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

1. 求める学生像

〈修士課程〉

社会福祉に関連する学問分野において必要と思われる基本的な専門知識を修得していて、社会福祉に関連する諸問題を解決するための研究力あるいは実践力を修得することに意欲を持っている人。

〈博士課程〉

修士課程を修了し、さらに研究者として高等教育機関や社会福祉に関連する研究所等において自立して研究活動を行うに必要な高度な研究あるいは豊かな知識の修得に主体的に取り組む意欲を持っている人。

2. 入学前に培うことを求める力

〈修士課程〉

(1) 研究と実践を進めるために必要な知識･技法と論理的思考､判断力を培うことを求めます。
(2) 合理的、論理的思考力、判断力そして表現力等を培うことを求めます。

〈博士課程〉

(1) 研究と実践を進めた成果を関連学会に発表するために、必要な知識・技法と論理的思考、判断力を培うことを求めます。
(2) 査読制度を有する学術雑誌に論文を投稿し、掲載証明を得られるために、合理的、論理的思考力、判断力そして表現力等を培うことを求めます。

3. 評価の方法

〈修士課程〉

「求める学生像」に適い､「入学前に培うことを求める力」を備えている人材かどうかをみるために、次の評価の方法を用います。

(1) 出願書類、口述試問、一般選抜では筆記試験、社会人選抜および特別選抜（学内）では小論文により、総合的に評価します。
(2) 多様な背景を持つ学生の受入れに関して、「社会人」対象の入試を行っています。
(3) 特別な支援を必要とする者については、すべての入試について「受験（修学）配慮希望票」の提出により入試に支障なく取り組むことができるように、配慮を行っています。

〈博士課程〉

「求める学生像」に適い､「入学前に培うことを求める力」を備えている人材かどうかをみるため

に、次の評価の方法を用います。
(1) 出願書類、口述試問、筆記試験により、総合的に評価します。
(2) 多様な背景を持つ学生の受入れに関して、「社会人」対象の入試を行っています。
(3) 特別な支援を必要とする者については、すべての入試について「受験（修学）配慮希望票」の提出により入試に支障なく取り組むことができるように、配慮を行っています。

4. 入学前に学習することを期待される内容
〈修士課程〉
(1) 社会福祉学に関するそれぞれの研究対象領域の基礎的知識と今後の研究を進めていく上で必要な研究法、統計法を学修しておくことを期待します。
(2) 学際的な知識の修得のために必要な基礎的英語能力を学修しておくことを期待しています。
〈博士課程〉
(1) 博士論文研究に相応しい文献研究調査(philology)能力と正確な学術用語活用(terminology)能力を兼ね備えていることを期待しています。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）
1. 教育課程編成
〈修士課程〉
社会福祉に関連する学問分野の諸問題を解決するための研究力や実践力を修得することおよび学生の研究テーマに対応する個別指導を社会福祉学コース共通の教育課程の編成方針としています。
〈博士課程〉
修士課程を修学した人が、さらに、研究者として高等教育機関や社会福祉に関連する研究所などにおいて自立して研究活動を行うに必要な高度な研究あるいは豊かな知識の修得をめざして編成しています。

2. 学修方法・学修過程
〈修士課程〉
社会福祉の理論、制度･政策、実践についてオーソドックスな修得をめざし、展開領域では、現代社会の福祉問題の解決に取り組める研究および実践的な力量の修得をめざしています。
〈博士課程〉
修士課程から一貫した学生の研究テーマに対応する個別の研究指導を行っています。

3. 学修成果の評価のあり方
〈修士課程〉
教員と学生自身によって評価されます。
(1) 教員による評価では、受け身の学修でなく、自らレポート課題、研究課題、実習課題を設定し、主体的に課題解決に取り組むことを求めています。課題選択のレベル、成果までの過程の分析や結果について、合理的、実証的にまとめているかを評価しています。
(2) 学生自身による評価は、本学独自の学修ポートフォリオによって学びの過程と学位授与の方針の達成度を可視化して確認します。
〈博士課程〉
教員と学生自身によって評価されます。
(1) 教員による評価では、受け身の学修でなく、自ら研究課題を設定し、主体的に課題解決に取り組むことを求めています。課題選択のレベル、成果までの過程の分析や結果について、合理的、実証的にまとめているかを評価しています。
(2) 学生自身による評価は、本学独自の学修ポートフォリオによって学びの過程と学位授与の方針の達成度を可視化して確認します。

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位の授与に関する方針）

1. 学生が身に付けるべき資質・能力の目標

〈修士課程〉
社会福祉に関連する学問分野の諸問題を解決するための研究力や実践力を修得している。
〈博士課程〉
研究者として高等教育機関や社会福祉に関連する研究所等において自立して研究活動を行うに必要な高度な研究能力あるいは豊かな知識を修得している。

2. 学位授与の要件

〈修士課程〉
修士課程の所定の科目を履修し、かつ社会福祉に関連する学問分野の諸問題を解決するための研究力や実践力を修得したと評価するに値する成果（修士論文）を提出できた人に修士の学位を授与します。

〈博士課程〉
博士課程の所定の科目を履修し、かつ研究者として高等教育機関や社会福祉に関連する研究所等において自立して研究活動を行うに必要な高度な研究あるいは豊かな知識の修得の評価に値する成果（博士論文）を提出できた人に博士の学位を授与します。原則として、社会福祉関連の学会などでの報告および国際標準逐次刊行物番号（ISSN）を持つ刊行物掲載実績を複数回（３回以上）持つ人の成果（博士論文）であることが望ましい。

福祉心理学専攻

教育研究上の目的

本専攻は、「臨床心理学分野」から構成されています。
臨床心理学分野は、臨床心理学の研究と実践を行う人材の育成をめざしています。臨床心理学の専門知識を有し、心理的な困難や苦痛を抱えている人を対象に心理アセスメントや心理面接等を用いてこころの回復を援助する実践家の養成を目的としています。
（公）日本臨床心理士資格認定協会より「Ｉ種指定校」の認可を受けています。2018 年度より、公認心理師の受験資格を取得するためのカリキュラムを設置しました。

教育目標

本専攻は、本学の建学の精神である「行学一如」を基盤とし、心理学に関する高度な知識と技術を学び、個人から社会の広義の福祉に幅広い心理学的知見を持ち、心理的援助・実践ができる人材育成を目標としています。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

1. 求める学生像

(1) 一人ひとりの人権や尊厳を重んずる人間理解を基に福祉心理学専攻の専門領域に強い関心を持ち、これらの領域において研究、実践を行う明確な意志を持っている人。
(2) 心理学の専門的知識・技法を偏りなく幅広く修得する意欲のある人。
(3) 合理的、論理的な思考力、判断力、表現力等の能力のある人。
(4) 主体性を持ちながら多様な人々と協働して研究と実践ができる人。

2. 入学前に培うことを求める力

(1) 研究と実践を進めるために必要な知識･技法と論理的思考､判断力を培うことを求めます。
(2) 合理的、論理的思考力、判断力そして表現力などを培うことを求めます。
(3) 人間関係において主体性を持ちながら他者を尊重し、共感性を持って接し、協働できる力を培うことを求めます。

3. 評価方法

上記の人材を選抜するために複数の入試制度を設けています。
すべての入試において志願理由書と研究計画書等の書類の提出を求め、上記「入学前に培うことを求める力」の項目 1.～2. を評価します。
すべての入試において口述試験を行い、上記「入学前に培うことを求める力」の項目 3. を評価します。
一般選抜および特別選抜推薦（学内）では、筆記試験を行います。社会人選抜では、小論文を行います。筆記試験または小論文により上記「入学前に培うことを求める力」の項目 1. を評価します。

4. 入学前に学習することを期待される内容

(1) 心理学に関するそれぞれの研究対象領域の基礎的知識と今後の研究を進めていく上で必要な心理学研究法、心理学統計法を学修しておくことを期待します。
(2) 学際的な知識の修得のために必要な基礎的英語能力を学修しておくことを期待しています。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

1. 教育課程編成

現代社会が複雑化していく中で、個人が自由で円滑な日常生活を送ることが難しくなっており、社会・労働環境もストレスフルな状況に陥る傾向にあります。このような現実に心理学的見地から介入できる専門家を養成すべく、福祉心理学専攻は、臨床心理学分野を設定しています。
臨床心理学分野は、人間が置かれている心理的状況や環境に応じて、心理学的アプローチを図るための科目編成をしています。具体的には、心的苦痛が長期化かつ深刻化し日常生活を円滑に過ごしにくい人や、機能低下・不全の状態にある組織を主な対象として、その人の独自な心的世界やその組織特有の構成・機能のアセスメントを行い、こころの回復のための心理療法やコンサルテーションを行う専門家を養成していく科目を編成しています。
なお、臨床心理学分野は臨床心理士養成と公認心理師養成のために必要な科目を編成しています。

2. 学修方法・学修過程

(1) 講義科目
問題解決型学習（PBL）、役割体験学習、課題学習が中心
問題解決型学習（PBL）、役割体験学習、課題学習を行います。院生同士のディスカッション、教員と院生とのディスカッションを行い、学習目的の達成と内容の理解を深めます。
(2) 演習科目
ディスカッションによる課題の理解
課題に沿って文献などを通じて調べてまとめ、プレゼンテーションし、院生間、院生と教員間でディスカッションをし、レポートを作成して課題の理解を深めていきます。
(3) 実習科目
学内の附属施設・関連施設と学外の協力機関での実習とケース・カンファレンス
一般市民に開かれた施設である学内の臨床心理相談室、大学附属病院のせんだんホスピタル、関連施設のせんだんの丘および学外の多岐にわたる実習協力機関で行われます。倫理を含めた実習前指導のほか、実習後は実習に関するケース・カンファレンスを通じた指導を行い、院生の共通理解を深めます。
(4) 研究指導の内容や方法
教員 2 名による綿密な個別指導と発表会等による集団指導
実証的、論理的な研究を進めるため、院生 1 名につき指導教員、副指導教員を定め、テーマの選定や実証方法・分析方法の選択、論文構成や内容などに関して、綿密な指導を行っています。また、中間発表会・報告会などにより集団指導を行っています。
(5) 研究倫理教育
e ラーニングと実習・調査・修論を通じた研究倫理の修得

日本学術振興会の「研究倫理 e ラーニングコース」などにより研究倫理の基本を学修します。
そのうえで、実習などでのレポート作成に関しての守秘義務や個人情報の保護などの重要性を指導しています。レポート、修士論文などに関しては、引用文献・参考文献の明示を行い、剽窃のないように作成することを指導しています。調査に関しては、個人情報の保護、個人を特定できないこと、調査を拒否できる権利があることなどを被験者に理解しやすく説明し、インフォームド・コンセントを得る能力を高めるように指導しています。

(6) キャリア支援
職業倫理教育・学会や研修会への参加
内・外の機関などで実習・調査を行う場合、事前に日本臨床心理士会の倫理綱領に基づく倫理や各機関の職務規程に関するガイダンスを行っています。修了後も外部実習・調査についてのレポート作成と報告などに際して守秘義務と個人情報保護に留意することの指導も行っています。
各種学会への入会と参加を極力勧めています。臨床心理学分野では、日本心理臨床学会の全員の入会、研修会へ参加、発表を勧めています。

3. 学修成果の評価のあり方

教員と学生自身によって評価されます。
教員による評価では、受け身の学修でなく、自らレポート課題、研究課題、実習課題を設定し、主体的に課題解決に取り組むことを求めています。課題選択のレベル、成果までの過程の分析や結果について、合理的、実証的にまとめているかを重視しています。課題のレポートのまとめ方、プレゼンテーション能力、ディスカッション能力、修了課題のレポート等から総合的に評価をします。
学生による評価は、本学独自の学修ポートフォリオによって学びの過程と学位授与の方針の達成度を可視化して確認します。

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位の授与に関する方針）

1. 学生が身に付けるべき資質・能力の目標

(1) 心理学諸領域の専門的知識・技能の修得
臨床心理学を含む心理学全般の基礎的素養と専門的知識、技法、姿勢・態度、倫理を修得している。

(2) 心理学的研究能力の修得
心理学に関する研究課題を自ら設定し、専門的知識や技法を用いて、心理学研究法の方法を使い、研究倫理を踏まえて、研究をすることができる。

(3) 多角的視点を持った実践
社会の変化（多文化や多様性の共生社会を含む）に伴う要請や各種職域の要請に対応できるよう多次元に渡る広い視点から実践することができる。

(4) 知識・実践・研究の融合
心理学の専門的知識、心理的実践活動、そして心理学研究の 3 領域を互換的に総合することができる。

(5) 多面的な支援活動
心理アセスメントと心理療法を行い、こころの問題への援助、こころの健康の援助、家族関係の援助、福祉の援助、発達の援助、矯正の援助、臨床的地域援助、災害・被害への援助、心理的・社会的適応の支援（チームアプローチ、多職種連携、地域連携などを含む）などのいずれかを実践できる。

学位授与の要件

本専攻の教育目標を理解し、臨床心理学分野は必修科目を含む 39 単位以上を取得すること。

教育学研究科

教育研究上の目的
本専攻は、本学の建学の精神と教育現場の要請に応じ、通常学級におけるさまざまな困難を示す児童生徒や特別支援学級の児童生徒の指導、支援において、課題の解決に向けて多角的・科学的にアプローチし、実践的指導力とコーディネート力を持つ教育現場の中核となる教員として、また、専門性の高い理論と豊かな実践力を身に付けた教育研究者として、これからの教育に貢献できる人材の育成を目的としています。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）
教育への使命感と熱意を持ち、特別な教育的ニーズを有する児童生徒にかかわる諸問題について関心が高く、自らの知識・技能を高め、高い専門性と実践力を身に付け、それら諸問題を多面的に研究したいという学生の入学を希望します。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）
「共生社会」の構築に貢献するという本研究科の理念のもと、教育に関する高度な専門的知識・技能とそれらを支える理論的基礎を学修します。さらに、特別な教育的ニーズを有する児童生徒にかかわる諸問題を自ら発見する視点を学修し、その具体的かつ実践的な解決策を探究してきた過程を修士論文としてまとめます。

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位の授与に関する方針）
特別な教育的ニーズを有する児童生徒への教育に関する高度な資質・能力とそれらを支える理論的基礎に基づき、「共生社会」の構築に向けて現代社会が抱える問題を発見し、教育に関する諸問題の解決を具体的に推進しうる研究者、高度職業人として認められたものに「修士（教育学）」を授与します。

教育学専攻

教育研究上の目的
本専攻は、本学の建学の精神と教育現場の要請に応じ、通常学級におけるさまざまな困難を示す児童生徒や特別支援学級の児童生徒の指導、支援において、課題の解決に向けて多角的・科学的にアプローチし、実践的指導力とコーディネート力を持つ教育現場の中核となる教員として、また、専門性の高い理論と豊かな実践力を身に付けた教育研究者として、これからの教育に貢献できる人材の育成を目的としています。

教育目標
本専攻は、本学の建学の精神である「行学一如」を基盤とし、教育学に関する高度な知識と技術を学び、個人から社会の広義の教育に幅広い専門的知見を持ち、教育に関する研究や教育の実践ができる人材育成をめざしています。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）
1. 求める院生像
教育への使命感と熱意を持ち、特別な教育的ニーズを有する児童生徒にかかわる諸問題について関心が高く、自らの知識・技能を高め、高い専門性と実践力を身に付け、それら諸問題を多面的に研究したいという学生の入学を希望します。

2. 入学前に培うことを求める力
(1) 教育学の研究と実践を進めるために必要な知識・技法と論理的思考、判断力を培うことを求めます。

(2) 合理的、論理的思考力、判断力そして表現力などを培うことを求めます。
(3) 人間関係において主体性を持ちながら他者を尊重し、共感性を持って接し、協働できる力を培うことを求めます。

3. 評価方法

(1) 人材を選抜するために複数の入試制度を設けています。
(2) すべての入試において志願理由書と研究計画書などの書類の提出を求め、前項 2. の（1）～（2）を評価します。
(3) すべての入試において口述試験を行い、前項 2 の（3）を評価します。
(4) 一般選抜および特別選抜推薦（学内）では、筆記試験を行います。社会人選抜では、小論文を行います。筆記試験または小論文により前項 2 の（1）を評価します。

4. 入学前に学習することを期待される内容

(1) 教育学に関するそれぞれの研究対象領域の基礎的知識を学修しておくことを期待します。
(2) 学際的な知識の修得のために必要な基礎的英語能力を学修しておくことを期待しています。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

1. 教育課程編成

「共生社会」の構築に貢献するという本研究科の理念のもと、教育に関する高度な専門的知識・技能とそれらを支える理論的基礎を学修します。さらに、特別な教育的ニーズを有する児童生徒にかかわる諸問題を自ら発見する視点を学修し、その具体的かつ実践的な解決策を探究してきた過程を修士論文としてまとめます。

2. 学修方法・学修課程

(1) 講義科目　アクティブ・ラーニングを取り入れた指導
問題解決型学習（PBL）、役割体験学習、課題学習などを行います。院生同士のディスカッション、教員と院生とのディスカッションを行い、アクティブ・ラーニングを交えながら学修の目的・内容の理解を深めます。
(2) 演習科目　ディスカッションや実践を通した課題の理解
課題をレポートにまとめ、プレゼンテーションし、院生間、院生と教員間でディスカッションをし、課題の理解を深めていきます。
(3) 研究指導の内容や方法　綿密な個別指導と発表会等による指導
実証的、論理的な研究を進めるため、院生一人ひとりに指導教員を定め、テーマの選定や実証方法・分析方法の選択、論文構成や内容等に関して、綿密な指導を行っています。また、中間発表会・報告会等により集団指導を行っています。
(4) 学修成果の把握・評価の方法と指標
課題のレポートのまとめ方、プレゼンテーション能力、ディスカッション能力、修了課題のレポート等から総合的に評価をします。
(5) 研究倫理教育　e ラーニングと研究活動・実習を通じた研究倫理の修得
実習などでのレポート作成に関しての守秘義務や個人情報の保護等の重要性を指導しています。レポート、修士論文等に関しては、引用文献・参考文献の明示を行い、剽窃のないように作成することを指導しています。研究活動を通じて、研究協力者の個人情報の保護、協力を拒否または撤回できる権利があることなどを協力者に説明する能力を高めるように指導しています。また、日本学術振興会の「研究倫理 e ラーニングコース」なども使って学修します。
(6) キャリア支援　学会や研修会などへの参加・職業倫理教育の実施
研究成果を学会発表や論文発表などにより学外へ発信するとともに、常に新しい知見を取り入れるために、学会や研究会などに参加して研鑽をするように指導します。さらに、職業人としての倫理観を持つためにハラスメントの防止について指導していきます。特に、

高度専門職をめざす院生には、教育現場での課題を解決する力を持たせるとともに、学校でリーダーシップをとることのできる、積極的な姿勢を涵養していきます。また、研究者をめざす院生には、研究を遂行していく力を涵養していきます。

3. 学修成果の評価のあり方

(1) レポート、プレゼンテーション、ディスカッションの内容等から総合的に評価をします。
(2) 本研究科では、受け身の学修でなく、自らレポート課題、研究課題、実習課題を設定し、主体的に課題解決に取り組むことを求めています。課題選択のレベル、成果までの過程の分析や結果について、合理的、実証的にまとめているかを評価しています。
(3) 院生自身は、本学独自の学修ポートフォリオによって学びの過程と学位授与の方針の達成度を視覚化して確認します。
(4) 修士論文は、公開された口述試問を経て、総合的に評価されます。

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位の授与に関する方針）

1. 院生が身に付けるべき資質・能力

特別な教育的ニーズを有する児童生徒への教育に関する高度な資質・能力とそれらを支える理論的基礎に基づき、「共生社会」の構築に向けて現代社会が抱える問題を発見し、教育に関する諸問題の解決を具体的に推進できる。

2. 学位授与の要件

必修科目および選択必修科目を含む 30 単位以上の単位を取得し、前項の資質・能力を持つ高度職業人、研究者として認められたものに「修士（教育学)」を授与します。

通信教育部
総合福祉学部

教育研究上の目的

多角的視野から教育・研究に取り組み、知識、技術、社会的実践力を錬磨し、福祉社会の実現に資する人材の育成を目的とする。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

本学の建学の精神は「行学一如」です。そこにあるのは「理論知」と「実践知」の調和です。アドミッション・ポリシーとして「理論」と「実践」に対応しうる能力、意欲、適性、社会的経験などを提示します。また、通信教育部では、生涯教育機関として幅広い年齢層の方々の入学を希望します。在宅での学習が中心となる通信教育での学習方法を理解し継続する意思、学ぶ意思を確認するために、志望理由書などを含む書類選考を実施します。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

学生はカリキュラムを通じて「知的アイデンティティの確立」をめざさねばなりません。そのため学士力として要求されている 「知識・理解」、「汎用的技能」、「態度・志向性」、「総合的な学習経験と創造的思考力」 をカリキュラムで実現し、各学科の人材育成上の目的・教育目標を達成するための教育課程を編成します。

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）

学士としての「質保証」のため「単位の厳格化」と「高い公共性と倫理性」をポリシーにしています。
学士力としては、「知識・理解」、「汎用的技能」、「態度・志向性」、「総合的な学習経験と創造的思考力」 を身に付け、かつ所定の単位を修得した学生に学位を授与します。

社会福祉学科

教育研究上の目的
人間理解のための深い教養と福祉の専門知識を修得し、福祉領域における問題解決能力を有する人材を育成する。

教育目標
本学科の教育目標は、現在の社会構造や福祉環境を多面的に理解し、幅広い教養と深い専門領域の知識や技術を学修することによって、社会の発展に寄与できる人、多様な人々のライフステージのなかですべての人々の「幸せ」や「福祉」、「安全」や「安心」を追究できる人、多様な人々の生活問題を主体的に解決できる人、共生社会の実現に貢献できる人を育成することです。

アドミッション・ポリシー（入学者受け入れの方針）
1. 求める学生像
本学科では、次のような学生を求めています。
⑴ 主体性を持って人々とともに学び、実践する意欲を持った人。
⑵ 社会福祉学を学び、人々の幸せや福祉、地域共生社会の実現に貢献する人。
通信教育部では、幅広い年齢層を対象に学修機会を提供する生涯学習機関として、通信教育の学修方法を理解し、社会福祉学を学び実践にいかしたいという意欲を持っている方の入学を期待しています。

2. 入学前に培うことを求める力
入学前に次に挙げる力を培ってきた人を求めます。
⑴ 知識・技能
① 読解力、基本的な文章作成能力を有する。
② 高等学校までの履修内容について、総合的に身に付けている。
⑵ 思考力・判断力・表現力等
① 思考力：ものごとを筋道立てて考えることができる。
② 判断力：ものごとを正確に認識し、見解を明らかにすることができる。
③ 表現力：テーマについて調べ、わかったことや気付いたことを他者に伝えることができる。
⑶ 主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度
① 主体性：自分の目標を持って意欲的に学ぶことができる。
② 多様性：他者を尊重することができる。
③ 協働性：他者と協力して課題に取り組むことができる。

3. 評価方法
社会福祉学を学び人々の幸せや福祉に貢献したいという意欲、知識・技能、思考力・判断力・表現力等、主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度を確認するために、「志望理由書」の提出を求め、そのほかの必要書類とともに書類選考を実施します。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）
教育課程編成、学修方法・学修過程、学修成果の評価のあり方について、以下のように方針を定めています。
1. 教育課程編成
社会福祉実践力を体系的に修得するために、以下のように教育課程を編成しています。
⑴ 共通基礎教育

広い意味での「教養」を涵養し総合的・多角的な見方を身に付ける科目と、初年次教育として大学での学習にスムーズに入るために、レポートの作成方法や ICT 技術の使い方、科学的な考え方、社会の諸課題のとらえ方をグループ学習などを通じて身に付ける科目を配置しています。

(2) 専門教育

知識や技術を学び増やすだけではなく、その「理念・考え方」を学ぶことができ、福祉領域における問題解決能力、実践力が修得できるように科目を配置しています。

社会福祉の歴史と基本的な理念を学ぶ科目、「高齢者福祉」「障害者福祉」「精神保健福祉」「児童・家庭福祉」「公的扶助」など領域ごとの制度や対象者理解を学ぶ科目、「社会福祉援助技術」「精神保健福祉援助技術」などソーシャルワーク技法を身に付ける科目、「国際福祉」「福祉経済」など社会福祉の諸分野を学ぶ科目をおいています。さらに、１つのテーマに焦点をあてて、社会福祉の現代的課題、具体的な実践や実践で活用されている知見を学ぶ「特講科目」も配置しています。隣接分野の「心理学」「法学」「医学」「リハビリテーション」など、本学の特色ある教育である「防災・減災」についても学ぶことができます。

指定科目を学ぶことで、社会福祉士国家資格受験資格、精神保健福祉士国家資格受験資格を可能としています。

教育課程の全体像を示すため、基礎から応用へ順序よく学ぶために科目間の関係を示した「履修系統図」、各科目で身に付く力を示した「カリキュラム・マップ」を提示しています。

通信教育部では幅広い年齢層、多様な学習歴を持った学生を対象としており、自身がこれまでに身に付けた知識・体験と照らし合わせながら学ぶことが効果的と考えるため「履修系統図」にかかわらず、自身の興味・関心に応じて科目を履修し学修の順序を学生が自主的に決定できる自由度の高い教育課程編成としています。

2. 学修方法・学修過程

通信教育部では、法令により認められた多様な学修方法を取り入れ、学生が学修しやすい環境を整えています。

(1) 印刷教材による授業

科目により指定された教科書を配本し、それを『レポート課題集』に記載された「在宅学習のポイント」にもとづいて読んでいく学修方法です。教科書以外の参考文献での学びも推奨されます。

学んだ成果を確認するために、『レポート課題集』に記載された課題についてのレポートを提出することが必要です。レポート作成の過程を通じて、思考力や根拠に基づく情報発信力を身に付けることができます。レポートは担当教員により添削指導が行われ、学生に返却されますので、自身の理解の度合いを把握し、さらなる学修につなげることが可能です。

(2) 面接授業（スクーリング）

教員と直接対面して授業を受けることです。その学問の基礎的な知見を身に付けるとともに、自身がこれまでに身に付けた知識・体験と照らし合わせ、実践にいかすことを意識しながら授業を受ける過程で、主体的な学びを実現することができます。

また、参加型学習、グループワーク、問題解決型学習（PBL）などが行われる科目もあり、日常的に接することのない学生同士や教員との対話を重視します。

面接授業の方法は、さらに下記のように分けられています。

① 講　義

社会福祉学の理念、制度、技法を具体的な事例と関連付けて講義します。学生は得られた知識や技能に基づいて、自分のこれまでの実践などと関連付けて整理します。

② 演　習

社会福祉学の知識と技能を用いて課題を解決する演習を行います。学生は、ロールプレイや社会福祉援助に関する事例研究を通し、コミュニケーション能力やアセスメント（課題分析）の力を身に付けます。

(3) 放送授業（ビデオ・スクーリング）

面接授業が受講できない学生に受講機会を増やすことを主たる目的として、上記（2）－①の講義科目の一部を録画編集した動画を、面接授業を実施していない会場や時期に視聴する授業方法です。放送授業を実施する科目は、必ず印刷教材による授業と組み合わせて開講されます。

(4) メディアによる授業（オンデマンド・スクーリング）
面接授業が受講できない学生に受講機会を増やすことを主たる目的として、上記（2）－①の講義科目の一部を録画編集した動画を、自身のパソコンで視聴する授業方法です。メディア授業の技術的な特性を用いた、正解不正解が即時に確認できる「確認テスト」、わからないところは何度も聴きなおすことができる過程などを通じて、面接授業にはない効果を得ることも可能です。

(5) 実　習
社会福祉士、精神保健福祉士取得希望者は、社会福祉施設・病院などでの実習を行います。実習の過程を通して、ソーシャルワークの基礎的な技能を修得するとともに、具体的な課題解決の方法を学びます。

(6) 卒業研究・卒業試験
卒業研究では、学修の集大成として卒業研究を行い論文を作成します。指導教員について、学生はこれまでの学び、興味や関心に基づいて課題を設定し、データを収集し、結果を考察します。卒業試験では、学修の集大成として自身でテーマを１つ選び、それについて論述します。学生はいずれかを選択し、取り組む過程を通じて、自分が大学で何を身に付けることができたのかを確認することができます。

3. 学修成果の評価のあり方

社会福祉実践力は、教員と学生自身によって評価されます。学生は、単位の修得状況、学修実態調査、卒業者アンケートの機会を通じて、ディプロマ・ポリシーの達成度を確認します。各科目の成績評価は、到達目標の達成度（一部にルーブリック評価を導入）、学修過程（レポート、スクーリングなどへの参加状況）を踏まえて行われます。

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位の授与に関する方針）

社会福祉の学びの究極は人間と社会を理解することです。したがって、本学科が育成しようとしている人材に求められる資質は、人間と社会への深い関心と幅広い視野です。人間のニーズ（必要性）は多種多様であり、たとえ同じニーズであってもその状況に応じて、一つとして同じ対応はあり得ません。このような人間と社会を対象とする「社会福祉」だからこそ幅広い視野が求められてきます。

したがって、大学の建学の精神である「行学一如」と、教育の理念である「自利・利他円満」および本学科の教育目標を理解し、124 単位の単位取得と要件、求められる GPA を満たした上で、社会福祉学の知識と技術を修得し、下記の資質能力について実践を通して理解を深めた人物に学位を授与します。

1. 学生が身に付けるべき資質・能力の目標

本学科では、社会福祉実践力を習得するために、以下の資質と能力を育てます。

(1) 学びと行（実践）のための知識・理解

① さまざまな環境下にある人々の生活や社会で起きている現象に関心を持つことができる。
② さまざまな環境下にある人々の生活状況、それらをとりまく社会構造、身体・心理的要件、かかわり方などにどのようなものがあるかを理解できる。
③ さまざまな環境下にある人々の福祉的課題について、アセスメントできる。
④ 自らの関心や適性をふまえて、②③のなかでも特にどのようなアプローチで対象者の生活状況または社会をより良くすることができるかについて理解できる。
⑤ ④のアプローチについて、専門的知識を身に付けた体験がある。

(2) 学びと行（実践）のための技術

① 特定の課題について必要な情報を収集・整理・分析・考察し、文章化する（レポートまたはプレゼンテーションにまとめる）ことができる。
② ①を ICT を用いて発表することができる。
③ 他者の発表や意見を、関心を持って最後まで聞くことができる。
④ 他者の発表などに対して質問や発言をすることができる。
⑤ 他者の発言を促したり、自制を促すなどして全体の議論を調整することができる。

(3) 学びと行（実践）のための態度・志向性

① 普段の生活やさまざまな活動を通して抱いた疑問を大事にし、学びや行（実践）への動機を高めることができる。
② 疑問に答えるための行動を起こし（該当科目を履修する、図書館・各種メディアで情報を集める、教員・友人・家族・知り合いに聞く、当事者に聞きに行く、活動に参加する等）、自分なりの答えを見つけることができる。
③ 自分の意見を他者にわかるように伝える工夫をしており、適切に表現できる。
④ 異なる立場にある人の意見や考え方を知り、対話の中で理解を深めることができる。
⑤ 社会福祉の倫理観に基づいたコミュニケーション能力を発揮することができる。

(4) 行動

① 「学びと行（実践）のための態度・志向性」の 2.で見つけた現時点での自分なりの答えを実践すべく、目標を設定し、行動に移すことができる。
② その行動に必要な専門的知識・技能の向上に努めることができる。
③ 目標に向かって他者と協力することができる。
④ 目標に向かって最後までやり抜くことができる。／意欲を持っている。
⑤ 目標に向かう過程で困難に直面しても、成長する機会として前向きに捉え、乗り越えるための工夫ができる。
⑥ 身に付けた知識・理解、技術、態度・志向性を持って社会問題を解決する。／社会に貢献することに喜びを感じる。

2. 学位授与の要件

本学科の教育目標を理解し、124 単位以上の単位取得と要件、求められる GPA（*1）を満たした上で、社会福祉学の知識と技能・技術を修得し、上記の資質能力について実践を通して理解を深めた人物に学位を授与します。

（*1）GPA：Grade Point Average の略。授業科目ごとの成績について、例えば 5 段階（秀・優・良・可・不可）で評価した上で、それぞれに対して 4・3・2・1・0 のようにグレード・ポイント（GP）を付与し、その平均を算出して評価を行います。

福祉心理学科

教育研究上の目的

人間理解の基礎となる心理学的視点や理論・方法を学び、人々の抱える心理的問題を分析・解決できる人材を育成する。

教育目標

本学科は、本学の建学の精神である「行学一如」と、教育の理念である「自利・利他円満」を踏まえて、心理学の知識と技能を備え、それらを人々の幸せや福祉のためにいかすことのできる力、すなわち心理実践力のある人材を育成します。

アドミッション・ポリシー（入学者受け入れの方針）

1. 求める学生像

本学科では心理学の知識と技能を備え、それらを人々の幸せや福祉のためにいかすことのできる力、すなわち心理実践力を高めます。そのために、次のような学生を求めています。

(1) 主体性を持って人々とともに学ぶ意欲を持った人。

(2) 心理学を学び、人々の幸せや福祉に貢献したい人。

通信教育部では、幅広い年齢層を対象に学修機会を提供する生涯学習機関として、通信教育の学修方法を理解し、心理学を学びたいという意欲を持っている方の入学を期待しています。

2. 入学前に培うことを求める力

入学前に次に挙げる力を培ってきた人を求めます。

(1) 知識・技能

① 読解力、基本的な文章作成能力を有する。

② 高等学校までの履修内容について、総合的に身に付けている。

(2) 思考力・判断力・表現力等

① 思考力：ものごとを筋道立てて考えることができる。

② 判断力：ものごとを正確に認識し、見解を明らかにすることができる。

③ 表現力：テーマについて調べ、わかったことや気付いたことを他者に伝えることができる。

(3) 主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度

① 主体性：自分の目標を持って意欲的に学ぶことができる。

② 多様性：他者を尊重することができる。

③ 協働性：他者と協力して課題に取り組むことができる。

3. 評価方法

心理学を学び人々の幸せや福祉に貢献したいという意欲、知識・技能、思考力・判断力・表現力等、主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度を確認するために、「志望理由書」の提出を求め、その他の必要書類とともに書類選考を実施します。

<u>カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）</u>

教育課程編成、学修方法・学修過程、学修成果の評価のあり方について、以下のように方針を定めています。

1. 教育課程編成

心理実践力を体系的に修得するために、以下のように教育課程を編成しています。

(1) 共通基礎教育

広い意味での「教養」を涵養し総合的・多角的な見方を身に付ける科目と、初年次教育として大学での学習にスムーズに入るために、レポートの作成方法や ICT 技術の使い方、科学的な考え方、社会の諸課題のとらえ方をグループ学習などを通じて身に付ける科目を配置しています。

(2) 専門教育

「心理学概論」「福祉心理学」「心理学実験」「心理学研究法」などの科目を通じて、心理学の代表的な知識と基本的な技能を学びます。また、「社会心理」「発達心理」「教育心理」「臨床心理」「認知心理」などの領域における心理学各論の科目を通じて、幅広い分野の心理学を深く学び、人間理解と心理学的支援の基礎を身に付けます。さらに、特講科目を通じて、具体的な実践分野で活用されている心理学の知見を学びます。隣接分野の「福祉」についての科目や、本学の特色ある教育である「防災・減災」についての科目を学ぶことができます。

教育課程の全体像を示すため、基礎から応用へ順序よく学ぶために科目間の関係を示した「履修系統図」、各科目で身に付く力を示した「カリキュラム・マップ」を提示しています。

通信教育部では幅広い年齢層、多様な学習歴を持った学生を対象としており、自身がこれ

までに身に付けた知識・体験と照らし合わせながら学ぶことが効果的と考えるため「履修系統図」にかかわらず、自身の興味・関心に応じて科目を履修し学修の順序を学生が自主的に決定できる自由度の高い教育課程編成としています。

2. 学修方法・学修過程

通信教育部では、法令により認められた多様な学修方法を取り入れ、学生が学修しやすい環境を整えています。

(1) 印刷教材による授業

科目により指定された教科書を配本しますので、それを『レポート課題集』に記載された「在宅学習のポイント」にもとづいて読んでいく学修方法です。教科書以外の参考文献での学びも推奨されます。

学んだ成果を確認するために、『レポート課題集』に記載された課題についてのレポートを提出することが必要です。レポート作成の過程を通じて、思考力や根拠に基づく情報発信力を身に付けることができます。レポートは担当教員により添削指導が行われ、学生に返却されますので、自身の理解の度合いを把握し、さらなる学修につなげることが可能です。

(2) 面接授業（スクーリング）

教員と直接対面して授業を受けることです。その学問の基礎的な知見を身に付けるとともに、自身がこれまでに身に付けた知識・体験と照らし合わせ、実践にいかすことを意識しながら授業を受ける過程で、主体的な学びを実現することができます。

また、参加型学習、グループワーク、問題解決型学習（PBL）などが行われる科目もあり、日常的に接することのない学生同士や教員との対話を重視します。

面接授業の方法は、さらに下記のように分けられています。

① 講義

心理学の知識と技能を具体的な行動と関連付けて講義します。学生は得られた知識と技能に基づいて、自分のこれまでの体験を意味付けて整理します。

② 演習

心理学の知識と技能を用いて課題を解決する演習を行います。

③ 実験・実習

心理学の実験、心理検査や研究法の実習を行います。これらを通して、心理学の技能の基礎を修得するとともに具体的な課題解決の方法を学びます。

(3) 放送授業（ビデオ・スクーリング）

面接授業が受講できない学生に受講機会を増やすことを主たる目的として、上記（2）－①の講義科目の一部を録画編集した動画を、面接授業を実施していない会場や時期に視聴する授業方法です。放送授業を実施する科目は、必ず印刷教材による授業と組み合わせて開講されます。

(4) メディアによる授業（オンデマンド・スクーリング）

面接授業が受講できない学生に受講機会を増やすことを主たる目的として、上記（2）－①の講義科目の一部を録画編集した動画を、自身のパソコンで視聴する授業方法です。メディア授業の技術的な特性を用いた、正解不正解が即時に確認できる「確認テスト」、わからないところは何度も聴きなおすことができる過程などを通じて、面接授業にはない効果を得ることも可能です。

(5) 卒業研究・卒業試験

卒業研究では、学修の集大成として卒業研究を行い論文を作成します。指導教員について、学生はこれまでの学び、興味や関心に基づいて課題を設定し、データを収集し、結果を考察します。卒業試験では、学修の集大成として自身でテーマを１つ選び、それについて論述します。学生はいずれかを選択し、取り組む過程を通じて、自分が大学で何を身に付けることができたのかを確認することができます。

3. 学修成果の評価のあり方

心理実践力は、教員と学生自身によって評価されます。学生は、単位の修得状況、学修実態調査、卒業者アンケートの機会を通じて、ディプロマ・ポリシーの達成度を意識して確認します。各科目の成績評価は、到達目標の達成度（一部にルーブリック評価を導入）、学修過程（レポート、スクーリングなどへの参加状況）を踏まえて行われます。

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位の授与に関する方針）

1. 学生が身に付けるべき資質・能力の目標

心理実践力を修得するために、以下の 7 つの資質・能力を育てます。

(1) 多文化共生社会における総合的な人間理解力
- ① 人の心には、人々に共通する心の特徴（一般的原理や法則）と、人それぞれの心の特徴（個人差や多様性）があることを理解できる。
- ② 人の心と行動は、社会・環境と相互に影響しあっており、社会・環境の影響で変わることを理解できる。
- ③ 生活場面における人の心と行動について、心理学および隣接領域を含むさまざまな観点から幅広く総合的に理解できる。

(2) 根拠に基づく情報発信力
- ① 心理学の方法（文献検討、観察、実験、調査、面接など）を用いて、客観的なデータを集めることができる。
- ② 心理学の方法で得たデータを、図や表を用いて整理し、他者にわかりやすく伝えることができる。

(3) 批判的・創造的思考に基づく問題発見・解決力
- ① 多様な生活場面における人の心と行動を適切に把握して分析し、より本質的な問題に気付くことができる。
- ② さまざまな分野の知識を柔軟に組み合わせ、多様な他者の気持ちや意見を考慮し、予防策や解決策を見出すことができる。

(4) 多様な人々への共感と自他尊重に基づくコミュニケーション能力
- ① 他者の気持ちや意見を共感的に理解し、対話のなかで理解を深めることができる。
- ② 他者の気持ちや意見を尊重しながら、自分の気持ちや意見を適切に表現できる。

(5) 自己理解に基づくセルフコントロール力
- ① 自分の気持ち、考え方、行動とそれらの特徴に気付くことができる。
- ② 怒りや不安等の自分の感情に気づき、ストレスに対処することができる。
- ③ 自分の成長につながる目標を立て、やる気（モチベーション）を高めることができる。

(6) 集団理解に基づく対人調整力
- ① 集団の目標を共有し、役割を分担し、取り組む課題を明確にすることができる。
- ② 集団で情報を共有し、メンバーのやる気（モチベーション）に気を配り、自由に意見を出してもらうことができる。
- ③ メンバーのやりがいや喜びを共有し、メンバーの取り組みを前向きに評価できる。

(7) 多文化共生社会における心理学の学びをいかした社会貢献力
- ① 積み重ねてきた学びを統合して、多文化の人々の幸せや福祉に貢献することができる。
- ② 個人や社会に役立つテーマを設定し、積み重ねてきた学びをいかしながら当事者や関係者とともに課題の解決に取り組むことができる。

2. 学位授与の要件

本学科の教育目標を理解し、124 単位以上の単位取得と要件、求められる GPA（*1）を満たした上で、心理学の知識と技能を修得し、上記の「心理実践力」について実践を通して理解を深めた人物に学位を授与します。

（*1）GPA：Grade Point Average の略。授業科目ごとの成績について、例えば 5 段階（秀・優・良・可・不可）で評価した上で、それぞれに対して 4・3・2・1・0 のようにグレード・ポイント（GP）を付与し、その平均を算出して評価を行います。

通信制大学院
総合福祉学研究科

教育研究上の目的
本学大学院は、建学の精神に則り、人間科学に関する精深な学術の理論と応用を研究教授し、その深奥を究めて、文化の発展と人類の福祉に寄与しうる人材を育成することを目的としています。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）
すべての人がよりよく生きること(well-being)を可能にする共生社会の実現に寄与したいという熱意を持ち、社会福祉学、福祉心理学の知識・技術を高めるための研究する力、実践する力を身に付けたいという学生の入学を希望します。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）
共生社会の実現と人類の福祉へ貢献する人材の育成という本研究科の教育研究上の目的の下、社会福祉学と福祉心理学に関する高度な専門知識・技術と、その基盤となる理論を学修します。社会と人間にかかわる諸問題に対する視点、その解決のための方策を理論的に学修し、修士学位請求論文としてまとめます。

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位の授与に関する方針）
現代社会とそこで暮らす人々が直面するさまざまな問題を発見、解決し、共生社会の構築をめざすための研究能力、高度な専門性を有すると認められたものに「修士(社会福祉学)」および「修士(福祉心理学)」を授与します。

通信制大学院
総合福祉学研究科
社会福祉学専攻

教育研究上の目的
本学の建学の精神である「行学一如」を基盤とし、「自利利他円満」を教育の理念として、高度な研究倫理観と卓越した専門知識・技術を有する研究者や実践者の養成を目的としています。

教育目標
社会福祉に関連する分野についての理論、制度･政策、実践を全般的に修学します。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）
1. 求める学生像
社会福祉に関連する学問分野において必要と思われる基本的な専門知識を修得していて、社会福祉に関連する諸問題を解決するための研究力あるいは実践力を修得することに意欲を持っている方を受け入れます。主たる対象を社会人として、通信教育の学修方法を理解し、上記に合致した方の入学を期待しています。

2. 入学前に培うことを求める力
(1) 研究と実践を進めるために必要な知識･技法と論理的思考､判断力を培うことを求めます。
(2) 合理的、論理的思考力、判断力そして表現力等を培うことを求めます。

3. 評価の方法

「求める学生像」に適い、「入学前に培うことを求める力」を備えている人材かどうかをみるために、次の評価の方法を用います。

(1) 出願書類、専門科目についての筆記試験、口述試験（面接）により、総合的に評価します。
(2) 特別な支援を必要とする方については、「受験（修学）配慮希望申請書」の提出により入試に支障なく取り組むことができるように、配慮します。

4. 入学前に学習することを期待される内容

(1) 社会福祉学に関するそれぞれの研究対象領域の基礎的知識と今後の研究を進めていく上で必要な研究法、統計法を学修しておくことを期待します。
(2) 学際的な知識の修得のために必要な基礎的英語能力を学修しておくことを期待します。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

1. 教育課程編成

社会福祉に関連する学問分野の諸問題を解決するための研究力や実践力を修得することおよび学生の研究テーマに対応する個別指導を教育課程の編成方針としています。

2. 学修方法・学修過程

社会福祉の理論、制度･政策、実践についてオーソドックスな修得を目的とし、応用領域では、現代社会の福祉問題の解決に取り組める研究および実践的な力量の修得をめざします。
また、法令により認められた「印刷教材による授業」を取り入れ、主として社会人である大学院生が学修しやすい環境を整えています。

(1) 印刷教材による授業
科目により指定された教科書を配本し、それを『科目別ガイドブック』に記載された「在宅学習のポイント」に基づいて読んでいく学修方法です。参考文献での学びも推奨されます。学んだ成果を確認するために、『科目別ガイドブック』に記載された課題についてのレポートを提出することが必要です。レポート作成の過程を通じて、深い専門性、思考力や根拠に基づく情報発信力を身に付けることができます。レポートは担当教員により添削指導が行われ学生に返却されますので、自身の理解の度合いを把握し、さらなる研究につなげることが可能です。

(2) 面接授業（スクーリング）
演習科目では教員と直接対面して授業を受ける面接授業が必須となります。院生間、院生と教員間でディスカッションをし、課題の理解や課題解決力を深めていきます。

(3) 研究指導・修士論文指導
実証的、論理的な研究を進め、質の高い修士論文を完成するため、院生１名につき指導教員を定め、テーマの選定や実証方法・分析方法の選択、論文構成や内容などに関して、綿密な指導を行います。修士論文執筆の過程では、最低限面接指導３回以上、通信指導２回以上を必須としています。進捗状況を確認するための「中間レジュメ」は、院生同士で共有され、相互に刺激を受けることを可能にしています。

(4) 研究倫理教育
レポート、修士論文作成に関して、守秘義務や個人情報の保護などの重要性を指導しています。また、引用文献・参考文献の明示を行い、剽窃のないように作成することを指導しています。調査に関しては、個人情報の保護、個人を特定できないこと、調査を拒否できる権利があることなどを対象者に理解しやすく、説明できるインフォームド・コンセント能力を高めるように指導しています。日本学術振興会の「研究倫理 e ラーニングコース」等により研究倫理の基本を学修します。

3. 学修成果の評価のあり方

教員と学生自身によって評価されます。

教員による評価では、受け身の学修でなく、自らレポート課題、研究課題を設定し、主体的に課題解決に取り組むことを求めています。課題選択のレベル、成果までの過程の分析や結果について、合理的、実証的にまとめているかを評価しています。
学生による評価は、学位授与の方針の達成度を自身で確認します。

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位の授与に関する方針）

1. 学生が身に付けるべき資質・能力の目標

社会福祉に関連する学問分野の諸問題を解決するための研究力や実践力を修得している。

2. 学位授与の要件

所定の科目を履修し、かつ社会福祉に関連する学問分野の諸問題を解決するための研究力や実践力を修得したと評価するに値する成果（修士論文）を提出できた人に修士の学位を授与します。

福祉心理学専攻

教育研究上の目的

福祉心理学を基礎として、心理学に関する基礎的な素養を身につけ、広義の社会福祉に寄与する人材養成、すなわち人間が社会生活を営む中で直面する諸課題に対して科学的に追求しその解決に取り組むことができるよう援助する人材の育成を目指しています。修了後は、発達領域、教育領域、司法領域、産業領域での福祉に寄与する高度の専門家となることを目標としています。

教育目標

本専攻は、本学の建学の精神である「行学一如」を基盤とし、心理学に関する高度な知識と技術を学び、個人から社会の広義の福祉に幅広い心理学的知見を持ち、心理的援助・実践ができる人材育成を目指しています。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

1. 求める学生像

(1) 一人ひとりの人権や尊厳を重んずる人間理解を基に福祉心理学専攻の専門領域に強い関心を持ち、これらの領域において研究、実践を行う明確な意志を持っている方。
(2) 心理学の専門的知識・技法を偏りなく幅広く修得する意欲のある方。
(3) 合理的、論理的な思考力、判断力、表現力などの能力のある方。
(4) 主体性を持ちながら多様な人々と協働して研究と実践ができる方。なお、主たる対象を社会人として通信教育の学修方法を理解し、上記に合致した方の入学を期待しています。

2. 入学前に培うことを求める力

(1) 福祉心理学専攻の研究と実践を進めるために必要な知識・技法と論理的思考、判断力を培うことを求めます。
(2) 合理的、論理的思考力、判断力そして表現力等を培うことを求めます。
(3) 人間関係において主体性を持ちながら他者を尊重し、共感性を持って接し、協働できる力を培うことを求めます。

3. 評価方法

(1) 上記の人材を選抜するために、入学試験を実施します。志望理由書と研究計画書などの書類の提出を求め、上記 2. の項目（1）～（2）を評価します。専門科目についての筆記試験を行い、上記 2. の項目（1）を評価します。口述試験を行い、上記 2. の項目（3）を評価します。
(2) 特別な支援を必要とする方については、「受験（修学）配慮希望申請書」の提出により入試

に支障なく取り組むことができるように、配慮します。

4. 入学前に学習することを期待される内容

(1) 心理学に関するそれぞれの研究対象領域の基礎的知識と今後の研究を進めていく上で必要な心理学研究法、心理学統計法を学修しておくことを期待します。
(2) 学際的な知識の修得のために必要な基礎的英語能力を学修しておくことを期待します。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

1. 教育課程編成

現代社会が複雑化していく中で、個人が自由で円滑な日常生活を送ることが難しくなっており、社会・労働組織もストレスフルな状況に陥る傾向にあります。このような現実に、福祉心理学を基礎として個人および社会の広義の福祉を実現するため福祉心理学的知見を活用し、こころの健康の回復、維持、促進する専門家を養成すべく、人間が置かれている心理的状況や環境に応じて、心理学的アプローチを図る力を身に付けるための科目編成をしています。

2. 学修方法・学修過程

法令により認められた「印刷教材による授業」を取り入れ、主として社会人である大学院生が学修しやすい環境を整えています。

(1) 印刷教材による授業
科目により指定された教科書を配本し、それを『科目別ガイドブック』に記載された「在宅学習のポイント」に基づいて読んでいく学修方法です。参考文献での学びも推奨されます。学んだ成果を確認するために、『科目別ガイドブック』に記載された課題についてのレポートを提出することが必要です。レポート作成の過程を通じて、深い専門性、思考力や根拠に基づく情報発信力を身に付けることができます。レポートは担当教員により添削指導が行われ学生に返却されますので、自身の理解の度合いを把握し、さらなる研究につなげることが可能です。

(2) 面接授業（スクーリング）
演習科目では教員と直接対面して授業を受ける面接授業が必須となります。院生間、院生と教員間でディスカッションをし、課題の理解を深めていきます。
研究法について学ぶ講義科目でも面接授業が必須となります。大学院レベルで求められる心理学の研究方法の技能を修得します。

(3) 研究指導・修士論文指導
実証的、論理的な研究を進め、質の高い修士論文を完成するため、院生１名につき指導教員を定め、テーマの選定や実証方法・分析方法の選択、論文構成や内容などに関して、綿密な指導を行います。修士論文執筆の過程では、最低限面接指導３回以上、通信指導２回以上を必須としています。進捗状況を確認するための「中間レジュメ」は、院生同士で共有され、相互に刺激を受けることを可能にしています。

(4) 研究倫理教育
レポート、修士論文作成に関して、守秘義務や個人情報の保護などの重要性を指導しています。また、引用文献・参考文献の明示を行い、剽窃のないように作成することを指導しています。調査に関しては、個人情報の保護、個人を特定できないこと、調査を拒否できる権利があることなどを対象者に理解しやすく、説明できるインフォームド・コンセント能力を高めるように指導しています。日本学術振興会の「研究倫理 e ラーニングコース」などにより研究倫理の基本を学修します。

3. 学修成果の評価のあり方

教員と学生自身によって評価されます。
教員による評価では、受け身の学修でなく、自らレポート課題、研究課題を設定し、主体的に課

題解決に取り組むことを求めています。課題選択のレベル、成果までの過程の分析や結果について、合理的、実証的にまとめているかを評価しています。
学生による評価は、学位授与の方針の達成度を自身で確認します。

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位の授与に関する方針）

1. 学生が身に付けるべき資質・能力の目標

(1) 応用心理学全般の基礎的素養と発達心理学および臨床心理学に関する専門的知識・技法を修得している。
(2) 心理学に関する研究課題を自ら設定し、専門的知識や技法を用いて、心理学研究法の方法を使い研究をすることができる。
(3) 社会や各種職域の変化や要請に対して福祉・心理・社会の多次元に渡る広い視点を持って対応することができる。
(4) 心理学の専門的知識、心理学的実践活動、そして心理学研究の３領域を互換的に総合することができる。
(5) こころの健康の援助、家族関係の援助、社会福祉の援助、発達援助、地域活動の援助、災害・被害への援助、心理的・社会的適応の支援などを実践できる。

2. 学位授与の要件

教育目標を理解し、必修科目および修士論文を含む 30 単位以上を修得すること。